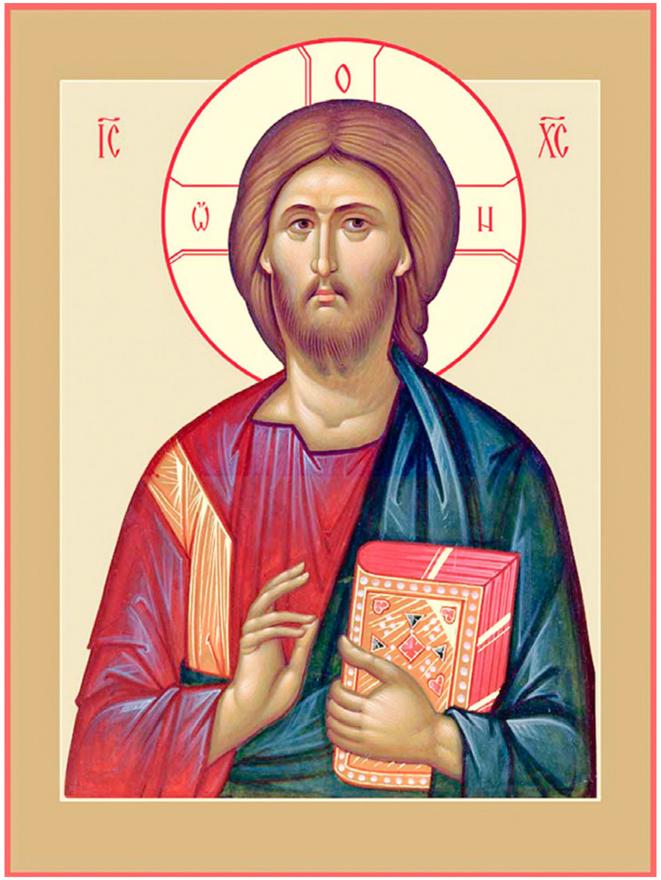
神は我らと共にすればなり

F.メリニコフ原著　S.ラヴロフ編著　土田定克訳

神は我らと共にすればなり

F・メリニコフ原著　S・ラヴロフ編著　土田定克訳

宣教ブックレット　④



神は我らと共にすればなり

仙台の大主教及び東京の副主教セラフィム座下の祝福による

はじめに（日本語訳者より）

このお話はかれこれ百年前、信仰をもつことがそのまま身の危険を意味する時代に書かれた小品をもとに、S・ラヴロフが必要に応じて大幅に改編したものである。原作はフョードル・エフィモヴィチ・メリニコフという作家（一八七四―一九六〇。司祭の息子）が、教会迫害の激しかった一九二〇年に書いた。作家や演説家として大活躍した彼の経歴から見て、この話は空想の物語と言うよりも、わが国であまり知られていない当時のソ連内情をリアルに伝える実話と言ってほぼ差し支えない。

本書の著者名、S・ラヴロフは、修道士が実名を隠すために用いた偽名である。ただ二〇〇〇年にモスクワから出版されたこの本がロシア中で大反響を呼んだため、現在では実名がロシア正教会の至聖三者聖セルギイ大修道院にて修道生活を送るアムヴロシー掌院（ユラソフ）であることが判明している。アムヴロシー掌院はどうこの本と出会い、修正を加えて出版まで至ったかをあるインタビューで話している。

> 一九四〇年代、モスクワ総主教庁のある刊行誌に小さなお話が載っていました。ポクロフスコエ村で無神論者がどう講演したか、というお話で『蜜蜂』と題されていました。このお話がセルギイ大修道院へもたらされたのは一九七八年です。ある天文学の教授（現、大聖堂総督）が、写真撮影した三～四頁のお話を持ってきたわけです。私はそれを読んで大変気に入り『これをどうにか現代用によみがえらせられないだろうか』と考えました。正教徒のちょっとした気分転換になると思ったからです。私たちはこのお話の『骨組み』を土台とし、修正を加えて膨らませました。（中略）この版では、原作では一言も話さなかったトロフィム君が話し始めます（そのために特別に会話を創作しました）。マチュヒンやデミヤン・ルキチ、討論会の他の参加者にも発言を加えました。（後略）

複雑な時代に書かれたメリニコフの原作と読み比べると、このラヴロフ版は現代に馴染むように編集されており、生きること、信じることの素晴らしさに焦点が絞られている。ラヴロフ著『神は我らと共にすればなり』では、本冊子に載せた第一章「公開討論会」に続いて第二章「神について」、第三章「救いへの道」と続くがここでは割愛した。

本冊子は二〇一八年十月にブリャンスクで発行されたロシア正教会刊行誌『焼けざるミトロファン紙』第八号からの複製翻訳版である。当地の編集者によって挿入されたプロステフ氏の絵画は丹念に描かれており、色彩芸術によってロシアの雰囲気およびロシアの世界観が見事に表現されている。もしこの本が、日本の読者に信仰を問う上での一助となれば、訳者としては望外の喜びである。

令和元年　聖使徒フォマの主日に　マトフェイ土田定克

神は我らと共にすればなり

光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。

（イオアン一二・三六）

煽動家

クリスマスに私は親戚のいるポクロフスコエという村へ行きました。そこで起きた興味深い事件について書いてみたいと思います。

祝日が近づくと村のあちこちに次のようなポスターが貼り出されました。文化会館のホールで「いかに神への信仰は生じたか」という講演会が開かれるというのです。またポスターには『学識協会』講師I.P.マチュヒン氏の講演後、公開討論会を開催」と記されていました。

ポクロフスコエ村は、その地方で大昔から正教の砦として有名でした。信仰を教える本を揃えている家庭がほとんどでした。子供たちは幼少期から正教の精神に基づいて育てられました。お祈りを覚え、年長者に連れられて教会へ通ったのです。しかしある頃から、小学校では子供たちから宗教的な〃色眼鏡〃をできる限り取り除くようになりました。そのためポクロフスコエ村へ派遣する講演者は念入りに選出されたのです。

聴衆はたくさん集まりました。医師、小学校校長はじめ教諭と児童、若者から年配者まで、信者や無神論的傾向の人々が文化会館ホールを埋めました。「公開討論会」という言葉が人々を魅了したのです。

文化会館の館長は講演者の前で体裁を保つため、ホールをしかるべく飾るよう努めました。ホールのあちこちにポスターを掲げたのです。ポスターには「宗教は民衆のアヘン」「宗教は麻薬」「立ち遅れた劣等生をなくせ」と書いてありました。

このような行事がポクロフスコエ村で催されることは珍しかったので、講演者を紹介する司会の役は文化会館の館長・アルトシューレル自身が務めました。丸々太ったアルトシューレルの見下ろすような冷たい目線と甲高い声とは反対に、講演者のマチュヒンは落ち着いて人懐っこく見えました。善良な目と愛想のよい笑顔が好感を与えました。四十歳くら

闘う天使

いに見えました。
　アルトシューレルは講演者を紹介し、特に講演後の公開討論会には希望者全員が参加できると付け加えました。
　マチュヒンの表情は演壇に登るとうって変わりました。口元の微笑みや善良な眼差しは消え、自信と決意に満ちた顔になって重々しく語り始めました。
「周知の通り、無神論の世界観とはいまや世界最先端の世界観です……」。アルトシューレルはホールをちらっと見ました。その視線はまるでこう言っているかのようでした。「お前らと俺とだけの時とは違うぞ。今から同志がお前らをこっぴどい目に合わせてやるぜ。でないと、ふん、だいたいこの村では祈りすぎなのさ」

教会からそらす詐欺導師

「宗教的な概念とは人々の無知や恐怖、自然への無力感という状況の中で作り上げられたものです」と講演者は自分の信念を吹きこみ続けました。「太陽、月、惑星、星々は人々にとって何

でもできる神々のように思われ、人々はその神々に祈りや捧げ物を献じてきたのです」
　宗教を否定する学者や作家による言葉や数字や引用文が、聴衆の耳にどっと押し寄せました。マチュヒンは、アジア・アフリカ・オーストラリアの原住民およびその部族の地霊信仰を引き合いに出しました。ありきたりの事実さえ、彼の口から出ると何か特別な意味を持つかのようでした。そして自分の知識量に酔い、その学識の高さで聴衆を圧倒しました。すべては宗教や神への信仰というものを土台まで崩すことがねらいでした。

「明らかに、現代科学の前ではあらゆる宗教観というものが頼りなく古くさいものです」とマチュヒンは続けました。「私たちは人類の理性がフル回転で力強く発揮される時代に生きています。今日、宇宙空間は巨大な研究所に変えられ、実験室へと変わりました。何千もの人工衛星が飛び交い、惑星間の飛行装置は月へ、金星へ、火星へと行ってきました。人々が宇宙を飛ぶことは普通のこととなり、人間は月の表面を歩いたのです」
　そう言うと彼は一息つき、ホールを見渡し、両手を広げて嫌味たっぷりに指摘しました。「それなのに、いいですか、空で神を見たという人はいないのですよ。以上とその他多くの事柄はすべて、宗教の教義を反駁し、宗教の旧弊を消し去るよう促しています。人類の理性の全盛期であ

るこの現代において、神秘や超自然への信仰などが未だに人々の頭と心を支配することがあるなどと、誰が信じるのでしょう」
マチュヒンはホールを見渡しました。そして満足気なアルトシューレルを見て任務を全うしたと感じると自信満々に話を結びました。
「宗教とは古びた木です。この木の主要な根っこはすでに切断されています。私たちはもうじき宗教を博物館へ収めてもよい時代が来ると確信しています。ちょうど、どこかの太古の紡ぎ車のように」
アルトシューレルは机の前から立ち上がり、胸を躍らせて拍手しました。無神論に心を捕えられた人々もそろって拍手し始めました。そうなのです。「上層部」の人々はポクロフスコエに誰を派遣したらよいか知っていたのです。信者たちにとって悲しかったのは講演会自体もそうですが、同じ村民が無神論の精神に感染したことでした。
講演が終わると休憩に入りました。大勢の人がデミヤン・ルキチという地元の養蜂家のところへ押しかけました。ルキチは六十歳くらいの老人で赤ちゃけた髭を少し生やし、穏やかで澄んだ目をしていました。村で知識人として評判でした。好奇心が強く、たくさんの本を読んで世の中の成り行きを注意深く見守っていました。さらに自然が大好きで、それが植物であろうと動物・鳥・

昆虫であろうと神の創造物すべての前に敬虔であり、子供のように魅せられていました。ありとあらゆるものの中に創造主の英知を見ていたのです。
村人たちはルキチに敬意を抱いて知恵者と呼び、よく助言を求めて相談にきました。ルキチは誰にでも打ち解けた口調で話しましたが、その話ぶりは何ともやわらかく愛らしく響くのでした……。ルキチは神について解説するのが何よりも好きでした。話し方は単純でわかりやすく、そして大切なことですが、説得力がありました。
講演会へデミヤン・ルキチは孫を連れてきました。十歳のトロフィム君です。
「いやにまた手の込んだ話だったね、この講演者の話は」とある村人が言いました。「世の中には色んな民族があるんだから、それだけ信仰も異なるでしょ。ひどい話だね。で、何て言う気だい」
「おいルキチ、どう思った」と別の村人が興味を示しました。「あの人と何か議論できそうなこと、見つけたかい」
「そりゃもう、神様が諭すままにさ」とルキチは謙虚に答えました。

エゴルおじさん、こんにちは

「いやルキチ、わしらは帰らないか」と親友は勧めました。「無神論者と話して何になる、どうせ笑い者にされるのが関の山さ」

「無神論者のために、信仰を擁護するわけではないと思うよ、むしろ信者が惑わされるのを防ぐために必要なんだ。でないともう何人か迷い始めている……。もうちょっと腰かけて聞いてみようよ、さらに何を話すつもりか――」と言うと、デミヤン・ルキチは自分の席へ戻りました。

ルキチは座って考えました。「今や何と信仰の薄い民族になったことか。味方でさえ逃げ腰になって嘲笑を恐れている……。かつてハリスチアニン（キリスト者）はハリストス（キリスト）のためなら受難も殉死さえも祝日のように受け入れていた。どうして神に疑いをはさむことなどできようか」

デミヤン・ルキチには賢明な人間が神なく生きられるとは思えませんでした。無神論者はみんな詐欺師だ、と思っていました。無神論者は不信心を装っているだけで、どうせ心には信仰がくすぶっているに違いない、と……。はたして思考中に神に問いかけることはないのだろうか、たとえ無意識でもいい、現に困ったときには教会へ駆け込むではないか。この講演者はどうだろう。ずいぶんさんざん話したが証明らしきことは何一つ証明しなかった。さて拝見しよう、彼は質問にどう答えるだろうか……。

公開討論会、開始

休憩時間が終わると全員席に戻りました。文化会館の館長アルトシューレルは、発言したい人はいませんか、と招きましたが、誰も応じませんでした。もう一度、呼びかけました。その時、最前列からデミヤン・ルキチがゆっくり立ち上がりました。アルトシューレルは注意深く見つめました。

「あなたが発言したいのですか。ではどうぞ」

デミヤン・ルキチは軽く咳払いすると、講演者に向かって話し始めました。

「お若い方よ、ずいぶんと何やかや話したね。しかも宗教を紡ぎ車にたとえてもうじき博物館に収めるようになるなどと……。はたしてそんなことがありえるかい。宗教は取って捨てられるような、そんじょそこらのモノと同じではないよ、それは国民の生活なんだから、まじめな問題にはまじめな態度で接しなきゃ。

それに未開人が恐れから神を考え出したと言っていたけれどね、それは違うよ。未開人が考え出したのは神じゃなくて、神々を、数々の偶像を考え出したんだ。なぜなら、――さっき言ってたように――、自然を神として崇め、太陽や木や石を拝んだからさ。それは異教の神々であって、私たちはそんな神々を信じちゃいないよ。信じてるのは唯一の神、天地の創造主さ、だから私た

ロシア産銀河系

ちには神を考え出す必要なんかないんだ。神はいらっしゃる。『今も、いつも、世々に』ね」と言うと、デミヤン・ルキチは少し口をつぐみました。

「神はいないと言ってたけれど、そう言ったのは君が初めてでもなければ最後でもないよ。そう、いつだったか神を否認した元司祭がこんな風に言っていた。『かつて神がいると教えて皆さんをだましました。しかし本当は神などいないのです』。もちろん我慢しきれなくて尋ねたよ。『もし君が以前だましていたのなら、誰が今になって君を信じるんだい』ってね。ところで、神がいないと証明できるのかい」

「何を証明する必要がありましょうか。

つい先ほど申し上げました、それについては科学の偉大な成果が証明しています、と。二十世紀は科学技術の世紀であり、宇宙飛行の世紀です。宗教はすでに遅れています」とマチュヒンはきっぱり繰り返しました。

「間違えているよ」とデミヤン・ルキチは異を唱えました。「科学では神を探しちゃいないさ、科学の課題はとんと別のところにあるからね。科学は自然界とその法則を研究し発見する、そしてもちろん知っていると思うけれど、偉大な科学者には信者が多かったよね。ロモノソフ(訳注：博学者、モスクワ大学創設者)、ピロゴフ（外科医）、パヴロフ（生理学者）、フィラトフ（外科医）、ツィオルコフスキー（物理学者）……。神を信じることは発見することを妨げなかったし今も妨げないどころか、むしろ手助けとなるものなのさ。神が科学者に教え諭したことは自然界にひそむ神の英知を見て創造主を賛美することだった。神への信仰は以前もあったし今もあるしこれからもずっとある。なぜだい。なぜなら人の心は天に憧れ、鳥のように天を恋い慕い、そういう風に神様によって創られているからさ。

　これはうちらの文豪でさえ認めてるよ。ひょっとして知ってるかい、最近、ヴラジミル・ソロウヒンの本を読んだのだけど、そこに面白いたとえ話が書いてあった。ある池に、フナが仲良く群れをなして住んでいたそうだ。つつましい生活だったが、あるときフナの宇宙飛行士みたいな奴が跳び立って水上にどんな生活があるのか見てみようと思いつき、そして跳び立った。が息が

できない。それ底へ急げ。『で、上には何かあったかい』と、仲間が聞いたそうだ。『何もないさ。あそこには何も無い』。

ほら、これとそっくりなのが人間だよ。宇宙に飛んだ、地表からちょっとだけ上に跳びはねた、で、もう叫んでしまう。『我々は飛んだ、しかし神は見なかった。神はいない』と。よりによってロケットから神を見れるものかねえ。神様は近づきがたい光の中にお住まいだ……。では、どうやったら神様について知ることができるんだろう。創造物を通してさ。見渡せば見つかる。どこにでも跡があるのだから……」

聴衆はみな注意深く、緊張して聞いていました。

蜜蜂

デミヤン・ルキチは続けました。

「うちの養蜂場では蜜蜂を飼っていてね、ずいぶん長いこと蜜蜂を観察してきたが、その賢い働きぶりに今でも驚くんだ。なんて上手な蜜房の作り方。見事に巣の穴を手作りしているさ、あんなにうまく人間はどうやったって作れない。しかも蜜の採取法や貯蔵法ときたら。本に書いてあったけど学者でさえ蜜蜂の知恵には驚くらしい。そこで質問したい。この知恵は一体どこから

湧いてきたのだい。誰が蜜蜂に教えたのだろうか」

「誰も蜂に教えた人はいません」と講演者は即答しました。「そしてこれ――あなたの表現によれば――この知恵も、本能や直感に他なりません。本能とは人間、動物、昆虫、つまりすべての生命体に備わる特徴です。本能は常に意識されるものではありませんが、合目的に動くため、つまり必要な目的を果たしてくれるのです。この本能が蜂にもあります。蜜蜂は何をしているか意識していません。たしかに、つつがなく目的に合わせて動いてはいますが。これで分かりましたでしょうか」

井戸

「分かったといえば分かったけれど、私が聞いているのはそのようなことじゃないよ。こう聞いたんだ、この知恵は、またはこの本能はどこから湧いてきたのだい」

「どこから、ですって」とマチュヒンは問い直しました。「習慣からです。習慣は、これもまた人間と動物に備わる特徴です。例えば私たちは歩くことに慣れ、書くことに慣れ、そしてこれを無意識のうちに機械的

に行っています。同じような習慣が動物にもあるわけです。それはすぐに身につくものではなく、何百年、何千年もかけて進化してゆくものなのです……」

「こりゃまあ」と、デミヤン・ルキチはびっくりして言いました。「一体どうなっているんだい。つまり千年前の蜜蜂は現代の学者よりも賢かった、ってことかい」

「どうしてそうなるでしょうか」とマチュヒンは理解できませんでした。

「だってそうじゃないかい。もし蜜蜂が学者でさえ今もこなせないような仕事をとっくの昔からやり慣れてたとしたら。だって学者はどうやっても花から蜜を採取できないんだよ、でも蜜蜂はそんなことパパッと簡単にできてしまう。それに本に書いてあったけど、蜜蜂は蜜に二十五パーセントの水と防腐作用のある物質を加えているらしい、蜜が発酵しないようにね。誰が教えたんだい。私たち人間でさえひとりで読み書きできるようにはならないよね。歩きですら教わってできるようになる。なのに蜂が、昆虫が、まさかひとりでできるようになったのだろうか」

マチュヒンはすぐに答えませんでした。少し困った様子が見てとれました。そんな彼をアルトシューレルは助けようとしました。

「講演内容に基づいて発言して下さい」と言いました。『いかに神への信仰は生じたか』が講演のテーマです。それないようにお願いします」

「それてなんかいないぞ」とホールにいた誰かがヤジを飛ばしました。「これは関係のある話でしょ。うまいことお茶を濁してないで、講演者にちゃんと答えさせてくれ」

ダーウィン主義

「科学には特別な理論があります。ダーウィン主義と呼ばれています」と再びマチュヒンは話し始めました。「ご存知のように、この呼び名はイギリスの学者・ダーウィンの名から取られたものです。この学者は世の中のすべては徐々に発達し完成していく、と証明しました。進化という、いわゆる段階的な発達が自然界で進行しているのです。何百万年も以前、動植物の世界は今日のそれとは全く異なる形をしていました。自然界では常に生存をかけた競争があり、この過程で弱いものや適応できないものは滅び、逆に健康で強いものは生き残り、強化して進化していきます。この過程は科学において自然淘汰と名付けられております。

と同時に、人の手による人工淘汰も存在します。たとえば畜産農家は異種交配によって動物をより良質にします。同じように園芸家も植物に接木技術を施します。新たに加えられた質は遺伝により受け継がれ、以後の世代の中で確立し、こうして個々の種が完成に向けて進化しているのです」

「まあよろしい」と、じっくり聞き終えたデミヤン・ルキチは賛意を表しました。「進化は起ころうと構わない、でももし進化があったとしてもそれはただの結果でしかないわけだ。私が聞いているのは原因についてだよ。あらゆる始まりの始まり、つまり神についてさ。その神から、進化も本能もその他諸々のすべてが生じたのだから」

マチュヒンはまたもや黙りました。そこでアルトシューレルはこの間を利用して言いました。

「問題は解決しました」と。しかしデミヤン・ルキチは引き下がろうとは思ってもいませんでした。

「どこが解決したのでしょうか」と控えめに指摘しました。「私としては、君にはすまんが質問は始まったばかりでね……。そうだ、園芸家について話したいことがある。というのも町に知り合いの庭師がいてね。なんてきれいな花を咲かせるんだろう、もう本物の奇跡だよ。あるとき聞いたさ。『ところで君、ちょっとでも花を咲かすことはできないかい。ほれ、たとえばイラクサから花を』。『むろん無理ですよ』とこんな質問にたまげていた。『では、木から鉄の長椅子を作ることは』。『そりゃもうめちゃくちゃな話でしょ』。どうしてだい。どうしてかというと自然界には法則があって、その法則は越えられないからさ。できるものなら枯れ木にちょっとでも接ぎ

ルーシ（ロシア）という名の遊星

木してごらん、園芸家が全員集合したってうまくいかない、だって枯れ木には命がないからね……。

蜜蜂だって思うほど単純じゃないよ。園芸家はおろか畜産農家も、養蜂家でさえも蜂に蜜房の作り方や蜜の集め方を教え込んだわけじゃないし、蜂に交雑したり接種したりしたわけじゃない。なのにどうやって蜜蜂はこんな至芸を知り得たのか。ほら、この質問に対する答えがどうも君から得られないんだ。隠さないで、蜜蜂の教師は誰なんだい。誰が蜜蜂に知恵を教え込んだのか、言ってくれないか」

マチュヒンは黙りこんでしまいました。デミヤン・ルキチは具体的な回答を求めていた

のです。神が蜂に知恵をつけたのか、それとも自然か。そして回答を得るために例を持ち出しました。
「飛行機と鳥を比べてみよう」と始めました。「飛行中、その構造上は飛行機も鳥も似ているね。だって飛行機は鳥に似せて造ったものだしね。ところがこんな面白いことがある。鳥は殺して骨ごとに分解できる。飛行機も部品ごとに分解できる。はて組立はどっちが楽だろうか。飛行機か、それとも鳥か。言わずもがな、飛行機は組み立てられても鳥はどうやっても組み立てられないよね。なぜなら鳥は生命体だからさ。では答えておくれ。誰が飛行機を造ったんだい」
「言うまでもなく人間です。設計者です」
「じゃ鳥は。鳥を創ったのは誰だい」
マチュヒンは黙りました。その代りにアルトシューレルが即答しました。
「言うまでもなく、自然ですよ」

幼児期のカササギ（おしゃべり）

自然について

「要するに、蜂の教師も鳥の設計者も自然、という理解でよろしいですね」と、デミヤン・ルキチは問い直しました。
「ほかに誰がいるでしょう。自然です。自然以外の何物でもありません」とマチュヒンは言いました。「自然は偉大なる教師にして設計者です。自然が生産し、自然が淘汰し、自然が鳥を創ったのです。すべてが自然のなせるわざです」
「こりゃまあ」と、デミヤン・ルキチはまたもや驚きを隠しませんでした。「ならば答えておくれ。自然とは何だい」
「自然とは私たち皆を囲んでいるものです」とマチュヒンが説明を始めました。「この目で見えるすべてのもの、そして存在するすべてのものです。空、星、海、大地、植物も、そしてあらゆる動物界も、これらすべてが自然です」
「ということは」と、マチュヒンに続いてデミヤン・ルキチが論じ始めました。「要するに自然とは、命のある存在と命のない物質から成るということだね。では生命体である人間・動物・鳥をひっくるめて、それを頭の中で自然界から取り除いて質問してみよう。『大地、空気、水その他は命を帯びるだろうか。もし生命体をすっかり取り除いたとしたら』。こんな答えが返ってく

パンと星

るだろう。『無理です。それは命のない物質ですから』。ところで、物質に理性はあるかい」

「ありません。命のない物質は考えることをしません」

「ということは、つまり自然界には命のある自然と命のない自然があり、思考力のある自然と思考力のない自然があるわけだ」とデミヤン・ルキチが結びました。「私たちは命のある自然を命のない自然から区別した。ではちょっと考えてみよう。この命のある自然の中にいる誰が鳥を創ったのだろうか。人間だろうか、違う。動物だろうか、違う。鳥だって自分自身を創ることなどできないよね……。それとも土が創ったのだろうか。または水や空気が創ったのだろうか。あるいはそういう物質がみんなそろって机を囲んで力を合わせて何もかも創り出したんだろうか。やはりそれも違う。

しかしなぜ違うのか。なぜなら理性ある人間でさえ生命体を創れないのならば、命のない自然なんてもってのほかなのさ。自然は決して生命体を創りやしないよ、ちょうどリンゴの木が、リンゴの代わりにウニを実らせることなどないようにね。理性も命もない物質から、合理的に整った世界と理性ある人間がひとりでにでき上がることなどありえるかい。別の言い方をすれば、胎

児を宿したまま死んでしまった女性が、生きた赤ちゃんを生めるだろうか。君はどう思うかな」

「無理です、もちろん」

「そうだよね、では説明しておくれ」と、デミヤン・ルキチは頼みました。「命のある自然と命のない自然、そのどちらの自然が鳥を創り、蜜蜂に偉大な知恵をつけたのか。よく言うよね、『愚者百人は一人も賢くできないが、賢者一人は愚者百人に知恵をつけられる』って。一体いかなる存在が鳥を創り、蜂に知恵をつけたのだろうか」

「すでに詳しく説明しました。蜜蜂の行動はすべて知恵によるのではなく、本能なのです」といらいらした様子でマチュヒンは答えました。「蜂には意識もなければ意志もありません」

「そりゃもっとびっくり仰天じゃよ」とデミヤン・ルキチはたしなめました。「理性と言葉のある人間に教えるのは楽でも、ほら、できるものなら牛や馬に読み書きを教えてごらんなさいな。それができたら本物の奇跡だよ。だけどそれよりももっと、とてつもない奇跡がここにある。小さな蜜蜂に、とことん学問を積み込んだ人にもできないような職人芸を教え込むとは。教えておくれ、結局、一体誰がこの奇跡を行ったのだい。誰だい」

沈黙。ホールも静まり返っていました。討論は皆の心を捕えていました。

「私は読んだよ、昔々、」とデミヤン・ルキチは続けました。「多くの異教の民族、つまりエジ

プト人・フェニキア人・ギリシャ人らは世界の始まりをこう捉えていた。もともと永遠の混沌、原初的な大洋があり、その暗く意味のない基本要素の蓄積の上に私たちの合理的に整った世界が出現した、と。この古代異教の教えを現代の無神論者は復活させたのさ。無神論者も『全宇宙は意味も理性もない物質から出現した』と宣言したよ。そして科学を算盤勘定で利用するのさ、自分に都合いいものは認めて、都合わるいものには目もくれない……」

アルトシューレルは、不機嫌に眉をひそめました。

「本題以外の討議を禁じます」

「いや真剣に考え、判断すべきです」と命令を無視してデミヤン・ルキチは言いました。「確かめなきゃ、この教えが正しいのかどうかを。ためしにレフ・トルストイの『戦争と平和』という本を取り上げてみよう。この本を読んだあとで一個一個の文字を切り取り、その文字でできた巨大な塊を地面にまき散らしてみたらどうなるか。『戦争と平和』の本はでき上がるだろか。無理だね、ごちゃごちゃの塊しかでき上がらないよね。ではこのごちゃごちゃの中からもう一度、本を作り出すには何が必要かな」

「決まりきったことよ」とアルトシューレルがほくそ笑んで答えました。「頭が必要さ」

「いやいや館長さん、頭ならサルでも持っているよ、でもサルは用意された単語からでさえ本を作ることはできないさ。頭には何が必要なんだい。理性だよね。誰の理性かな。文豪レフ・ト

見よ、我、門の外に立ちて叩く

ルストイの理性さ、そうでしょう」

マチュヒンは仕方なくうなずきました。

「では原初的な大洋から、ごちゃごちゃの状態から、この合理的で素晴らしい世界ができ上がる——そのためには何が必要だろか」と、デミヤン・ルキチは詰め寄りました。

「やはり理性が必要です」と、マチュヒンはぼそぼそ言いました。

「誰の理性だい。人間のかい」

「違います……」

「じゃ誰のかな」

「その、なにか超越したものの、でしょうねえ……」

「そうさ。その超越した理性こそ、神なのさ」

最後のセリフをデミヤン・ルキチは喜んで声を大にして言いました。心には聖詠ダヴィドの

荘厳な呼び声が響いていたのです。「われ不法の者になんじの道を教えん。不虔の者はなんじに帰らんとす」。

マチュヒンの方は気まずく、すっかり罠にかかった気分でした。彼は心の中でつぶやきました。「この老人に何を答えたら良いのだろう。太陽や星、植物や動物が、鳥を創り蜂に知恵をつけたと断言するのは笑止千万だ。それらは理性を持っていないのだから。そして……はたして本当にこの合理的な全世界が命も規律もない物質からひとりでに完成したのだろうか。どのように世界は生じたのだろう。これこそ、問いの中の問いなのだ。

偶然だろうか。事の成り行きだろうか。だとしたら周囲は無秩序で混沌としているはずなのだ……。自然界には一体どうして目をみはるような調和があり、何もかもがどんぴしゃりと整っていて、これほどにも深い意味があるのだろう」。

マチュヒンは突然汗だくになって水をがぶがぶ飲みました。アルトシューレルはまたもや彼に助け舟を出しました。休憩宣言です。

休憩

思考力も命もない物質からあたかも私たちの合理的で素晴らしい世界がひとりでに生じたと信

じるためには、それはもう気狂いか盲信者になるしかありません。ロシア人の心を知りつくしていたドストエフスキーは無神論者の信仰についてこう書いています。「ロシア人が無神論者になることは世界のどこの民族よりもたやすいことだ。そのロシア人ですら単に無神論者になるのではなく、まるで新しい信仰を信じるかのようだ。知らず知らずのうちに、真理など存在せんと信じてしまったのだ……」。

人々は廊下でざわざわと大声で討論していました。多くの人が真剣に神への信仰という問題について興味をかき立てられていました。デミヤン・ルキチは押し寄せた群衆に囲まれて感謝され、質問攻めにあっていました……。なぜなら大抵の人、特に若者にとっての無神論とは、たいして深く考えた結果ではなく単なる気まぐれに過ぎなかったからです。ちょうど服からホコリを払うように、吹けば飛び去るような代物でした。神はいるだろうか、と今まで真剣に考えたことなど恐らくなかったことでしょう。単にまわりの人が言っていた言葉を鵜呑みにしていたに過ぎません。世間で言われ書かれていることは、「神はいない、神を考え出したのは無知で無教養の人々だ」ということであり、世間知らずの若者はその嘘を真実として受け入れていたのです……。

でも今はデミヤン・ルキチが彼らを奮い起こしてしっかり考えさせました。すでに何人かはこう語り合っていました。マチュヒンは高い学識にも関わらず答えに窮してしまった、そして素朴な養蜂者が、二二が四とでもいうように神がいることを明証した……と。

ヴェラ・パヴロヴナさんの洞察

そのころ、マチュヒンとアルトシューレルは舞台裏の控室で座り込んでいました。マチュヒンは呆然としてメモが書かれたノートのページをペラペラとめくっていました。

「しかし予期してなかったよ、こんな爺さんが入り込んでくるなんて」と、いらいらしながらアルトシューレルが言いました。「だいたい誰かうちらの有識者が立ち上がってちゃちな質問をして解散っと思っていたんだ。あなたはご存じでしたでしょう、公開討論会なんて初めから予定してなかったことを。そう公表したのは宣伝のためで、少しでも人が多く集まるようにと思って……」

「しかしあの方に何を答えたら良いでしょうか」と不安そうにマチュヒンは聞きました。アルトシューレルは肩をすくめました。

「爺さんを説得して下さい。自然が蜂を創りました、ちょっと多めにぶつくさ息巻いてああとかこうとか……。そもそもあなたの方がよく分かっているはずでしょう、それこそ当局で特訓を

受けたんだから」

「あの方はおもいっきり頭がよく回るし博識だし、おまけに頑固です。だから自分の考え通りにもっていってしまう。こっちが『本能』って言うと『誰が与えたのか』、『進化』って言うと自説で『どこから進化が起こったのか』、『自然』って言うとまた『どんな自然が蜂にこう教えたのか』。こんなんで身をかわせますか。あの人は煙に巻けないですよ」

休憩時間はとっくに過ぎていました。マチュヒンは考え込んで座っていました。人々はじりじりしてざわついていました。

「行こう、ただでさえ大幅に遅れている」とアルトシューレルは言いました。二人はホールに入りました。講演者が演壇に登った瞬間、ホールは静まりました。

理解しがたい力

マチュヒンは始めました。「デミヤン・ルキチ氏はこう言いました、蜜蜂は特別な資質を持っており、その資質とはまるで神から与えられたものだ、と。私はすでにお答えしました、神ではなく自然が蜂に知恵をつけたのです、と。この答えは対話者に気に入って頂けませんでしたが、

それは彼が自然の本質について正しく理解していないからに過ぎません。

科学はこう認めています。自然界とは目に見える物質や物体だけでなく、その物質に込められた様々な力から成り立っていることを。空を見て下さい。空には太陽、月、惑星、星々があります。何によって位置が固定されているのでしょうか。判明したのは、自然界に引力があるということです。学者が解明したところによると惑星はそれぞれ大きな力を持っており、自らの方に他の惑星を引き寄せているのです。この力は見ることも触ることもできません、が疑いなく存在するのです。

全宇宙には理解しがたく神秘的で目に見えない力が非常に多くあります。その力は無生物と呼ばれる物質を通しても表れていますが、とりわけ神秘と未解決の謎を多く含むものが、生きた自然です。

少なくとも例の蜜蜂の本能を見てみましょう。何とも言えない神秘的な、理解しがたい力がこの本能の中でうごめいています。その力は見ることもできなければもしかしたら最後まで人間には認識できないかもしれません。でもその力は疑いなく存在します。この力こそ、あなたが質問された『教師』なのです」と言ってデミヤン・ルキチに向き合うと、マチュヒンはそこで演説を終えました。

自然という本……その著者は誰か

この説明はデミヤン・ルキチに気に入りました。まるで今までの質問はすべてマチュヒンをこのような回答へ導くためであったのかと思えたほどでした。

「ありがとう、主がその説明に対して君を救って下さいますように。一気に君が頭の切れる理性的な人間に見えましたよ」とマチュヒンを褒めました。「そういえばあるとき男が二人やってきて討論をしかけてきてね。二人してこう言い張って止まないんだ。世の中は自然以外に何もない。どんな神秘も超越した力も一切ない。あるのはただ物質だけ、他には何もない。やがてこっちも堪忍袋の緒が切れてついに会話を打ち切ったさ。だっていくら説得したって豚に真珠じゃ時間がもったいないだけさ……。だけどほら君は違うね、話ができる。ただ蜜蜂の先生についてだけ、もうちょっと詳しく説明してくれないかい。一体どんな理解しがたい神秘的な力が蜜蜂に教え込んだのだろうか」

「誰にも分かりません」とマチュヒンは仕方なく答えました。「たった今こう申し上げました。科学はこの力の本質を知りません。それは今のところまだ謎なのです」

「でもそうだとしても、この力は理性的な力だろうか。炯眼な力か、それとも盲目な力か。この力は要領を得て聡明なのか。君はどう思うかね」

「いや全く誰にも分からないのです」と不満げにマチュヒンは答えました。「この力については断じて何も申し上げることはできません」

　しかしデミヤン・ルキチはこれでは納得しませんでした。蜂に知恵を教え込んだ神秘的な力の問題は全く明らかで、思慮の浅い聴衆にさえ理解できるものと思われたからです。そしてただマチュヒンだけがなぜかそのことを認めたがらないように思われたからです。

　そこでデミヤン・ルキチは再び話し始めました。

「分からないのかい。ほう、では違う例を見てみよう。たとえば本だ。本ができ上がるためには何が必要だろうか。まず本の内容を考え出さなきゃいけない、そうじゃないかい。でその後に書くだろう。そして書き上がったらこう言えるね、この本は誰それの頭の産物だ、と。私たちは本を開いて読んで著者と知り合い、そしてその著者に能力があるかどうかを見破る、つまり本から著者に関する情報を知得することができるわけだ……。で聖大マカリーがこう言っている、概して学者も認めているが、自然界もまた本なのさ、開かれた本さ、自然界の表紙は空、裏表紙は大地。注意深く読めばそこにすべてが書いてある。

　ほら、だから学者はそれを読んでいかに自然界に多くの知恵があるかを知り得る。そしてここが最も肝心な点なのだが、学者は自然界にある法則を制定しているのではなくてただ発見してい

るだけなのさ。でもね、もし自然界にある法則を認めるのならば、その法則を造った方をも認めるべきじゃないのかね。違うかい。人間は自分の頭で自然界に隠れた法則をすべて知りつくすことはできないさ、でも人間は見抜くことができる、そしてここはすべて美しく賢く合理的で、君の言うように目的に合わせて創られていることを確信することができる。で、この合理性は何を意味しているのかね。要するに大いなる英知によって造られたことを意味しているのさ。どんな英知だろう。私たちの限りある頭脳では無限の英知、つまり神を知ることはできないんだ」

　この田舎の老人はなんと明確に、そして説得力をもってこのような秘められた概念を論理的に説き明かせたことでしょう。そしてそうなのです、もし自然界という本と人の書いた本、この二冊の本を手に取って見比べてみたらどんな結論が出せるでしょうか。人の書いた本は人の頭脳の産物、自然界という本は創造的英知の産物、つまり神の産物です。人の書いた本には重量、体積、つまり物質的な形が

ペトロヴィチとサーシャの喧嘩

飛び去った天使の羽根

あります。しかし本の原点は何でしょうか、この物質的な形でしょうか、それとも本に込められた理念でしょうか。思慮深い人ならば誰もが言うでしょう、本を書くにはまず意識の中で構成されなければならない――でなければ何を書けましょうか。ということは、まず初めに理念があり、そこから表れ出たものが形なのです。

　自然界という本を見てみましょう。初めには何があったのでしょうか、この目に見える物質でしょうか、それとも物質の中に込められた理念でしょうか。もちろん理念です。初めにあったものは形ではなく意識なのです、つまり本源には永遠に神がいて、物質とは見える形に表れ出た神の理念なのです。

　私たちが本を読むとき、著者を見てはいませんがその著者がいることを知っています。同じように私たちは世の創造主である神を見てはいません。しかし著者なく本が出現することなどありえないように宇宙も創造主なく生じることなどありえません。創造主は私たちから隠れていますが、私たちは彼の創ったものを見ています。

　自然界という神が書いた本は、その測りがたい雄大さと完全な調和、そして理解しがたい神秘で私たちを圧倒します。限られた頭脳はそれをすべて理解したり受容したりすることができません。どこからこのような大量の星々、太陽、惑星、彗星、星座、惑星の絶えず動き回る星雲が生じたのでしょうか。誰がそれを動かしたのでしょうか。当然、物質自身が自ら動き始めることはできません、ましてや合理的で整然とした動きならばなおさらです。学者は科学がこの点を説明する力がなく、推論や仮説に基づいていることを認めるべきなのです。

　マチュヒンは黙っていました。デミヤン・ルキチは何とか科学のあいまいさから彼を神の光へ引き寄せようと努めていました。

「巷には何だかすごく変な風に何もかも説明する人たちがいるね。彼らに聞いてごらん。『誰が全宇宙を創ったのか。空間、惑星、星々、地球を創ったのは誰か』。彼らは答える。『自然』。『じゃ自然を創ったのは誰だろう』、『自然は自分自身を創った』。ということは自然が存在しない時代があったわけだね。だとしたら自然はどうやって自分を創ることができたのだろうか。もしもともと存在していたのなら何のために自分自身を創り出す必要があったのだろうか。

いやお若いの、自然は神の創造物さ、自然を通して私たちは目に見えない創造主を認識するの

冬の素晴らしさ

さ。そのように使徒パウエルもローマ人への手紙の中で言ってるよ、第一章でね、肉眼では見えない全宇宙の創造主は、その創造物を観察することによって見えるようになる、と。だから主は人々にこうすすめるのじゃ。『目を高く上げ、誰が天の万象を創造したかを見よ』（イザヤ四〇・二六）と」

　デミヤン・ルキチは黙り、ホールを見渡しました。どの人の表情も真剣で考え込んでいました……。マチュヒンは演壇に立ったまま首を垂れていました。

「分かりやすいようにもう一つ例を出そう」とデミヤン・ルキチは再び話し始めました。「それ、君と二人である町へやってきたとしよう。高い建物を見つけた。近づいて見て、なんて立派な建物だろうって驚いた。そしてたぶん建築家を称えるだろうさ。こんな建物を建てたなんて才能ある人に違いないね。ところがもしこう言う人がいたらどうだろう、この建物はひとりでに現れました、建築家なんておりません、どっかの山から石が飛んできて一つずつ積み重なってできました、屋根も風が運んできたし、窓も扉も同様です、なんて言い出したら笑っちまわないだろうか、ちょっと頭がおかしくなったんじゃないかって。

　もし建物を見て、建築家の存在を見抜くならば、どうしてこの全宇宙という巨大な建物を見て、建築主を差しおいてすべて勝手気ままに出現したなどと言えるんだい。私たちの住むこの巨大な建物は私たちに都合よく建てられている、この地球という広間には雨も降るし太陽も照るし風も吹くし、それに空気もいい香りだし大地も食糧をたくさん……。

　違うよ、お若いの。これはもう世界を創った創造主がいると信じ、全宇宙の建築主として神がいることを信じるべきだよ、で私たちはそう信じ、大切に信じている。けれどもあなた方は信じない、で断言するんだ、すべてを創ったのは自然です、と。だよね。違うかい、何を黙っているんだい」

マチュヒンは演壇に立ったまま気落ちして、まるでしょぼくれた不幸な鶏のようでした。さっきまで抱いていた自信はどこへ消えてしまったのでしょう。まるで風に吹かれて飛んでいってしまったかのようです……。今は従順な馬が手綱に引かれていくかのようにデミヤン・ルキチの後をついていくだけでした。そのデミヤン・ルキチは彼を無神論からどんどん遠くへ、そしてどんどん神の方へと導いていくのでした。

「どんな時代にも」とデミヤン・ルキチは言いました。「人間にとっての関心事は自分がどこから来たのか、何のために生きていてどこへ消えるのか、つまり一人ひとりにとって興味深かったのは目に見えない神秘的な世界のベールを少しでも開き、誰がこれほどにも賢く、この私たちと私たちを取り巻く森羅万象を創ったのかを知ることだった……。

ほれ、蜂もそうさ、小さな創造物が私たちに語っている、ボクを創り、ボクに教えてくれたのはどっかの盲目やお馬鹿ちゃんじゃなくて偉大な賢者にして教師たる神様です、と。だって君、考えてもみておくれ、どれほど深い知恵を蜜蜂が知ってることか。蜜が腐らないような物質を探してくるんだよ。どこから知ったんだい。君の説明によると、蜂はすることなすこと無意識で意

志もなく働いている、つまり自意識や自分の意志によらないで働いているってことだね。ならば誰かが蜂のために思いめぐらし、誰かが蜂に指令しているわけだ。しかもどれほど思いめぐらしていらっしゃることか……。

分かるかい、必要なのはこの物質を森とか原っぱでただ探し当てることじゃないんだよ。その物質の特質を知らなくちゃいけない。ほら、博士が一生かけて学んでいるさ、いかに病気を治そうかって、でも特効薬などすぐに見つかるものじゃないよ、ところが蜜蜂はどこで学んだわけでもなく必要な物質をパパッと簡単に見つけるんだ。誰が蜂に指図しているのだろか。すべてのものの特質をご存じのお方さ。このちっぽけな昆虫とか虫けらを学者も舌を巻くほど賢くできるお方、自然界のすべてが従うお方、自然界に法則を与え、全世界を統治されているお方だよ……」

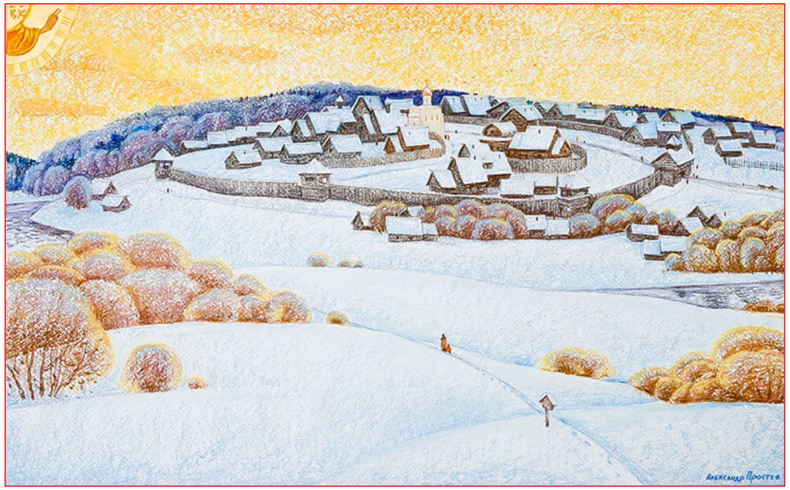
「それはどなたなのでしょう」とマチュヒンはぼんやり反応しました。

「全能なる神さ」とデミヤン・ルキチは堂々と、祈るように敬虔に発言しました。「神が『みな知恵をもって造れり』なのさ」

「誰でも自分の流儀で考える自由があります」とマチュヒンは肩をすくめて言いました。

「じゃ言っておくれ、君はどう思うのさ、誰が蜜蜂に知恵ある仕事を教え込んだのさ」

「いい加減にしてください、問題は解決済みです。それにしてもあなたは何かテーマにそって話せないのですか」と再びアルトシューレルが邪魔をしました。しかしデミヤン・ルキチは彼を



ラドネジ町。14世紀

今回は相手にせず、マチュヒンに問い続けました。

「もちろんこの点は賛成だよね、私たちは本を見て『作家』が書いたと見抜く、車ならどこかの『技師』が発明したと見抜く。そして君も私もしっかり見抜いていると思うが、蜜蜂は、本や車に比べてどれほど賢明なものか、つまり蜜蜂を創った『存在』とは、この世のどんな作家や技師よりも上、ってことになるよね。だとしたら自分の頭で考えてごらん、はたして私の考え方は正しくないだろうか」

マチュヒンは答えませんでした。何かについて思い巡らし、あまりに集中していたため質問されたことさえ気づかないほどでした。それに演壇から降りて机の横に座っていました。

「そもそも本題に沿って話をしてください」と、またもや我慢しきれずにアルトシューレルは言いま

した。「詳しく説明されたでしょう、神への信仰は人々の無知から生じたものだということを。まさにこの点について話すべきで、人々の頭脳を曇らせないで下さい……」

聴衆はざわつきました。

「その点、まだ判明しちゃいないぞ、どっちがどっちの脳ミソを曇らせているのかね。質問に答えて下さい」と若者が叫びました。

「なに黙ってるの。さっさと言っておしまい、誰が蜜蜂を創ったの」と最前列に座っていた老婆が要求しました。

「一匹の蜂」とデミヤン・ルキチが話し出すと、騒ぎはすぐに収まりました。「一匹の蜂はこうもはっきり分かりやすく神の英知ある力を物語っているさ。それに対して何を反論できるだろうか。

人々が神を編み出したんじゃない、神への信仰は世の始まりからあったし、常に人の心にあり続けるものさ。ちょうど木の種の中に何もかもが、すでに幹も根も枝も実もあるのと同じで、人の心には神によって感情も信仰も植えつけられているからね。ただ木だって曲がって伸びたり病になったり実がならなかったりする、それはどんな土地で育ったか、どんな天気だったか、どんな手入れをしてもらったか、によるものだね。

同じように人間もしばしば心がゆがんだり病んだりする、もし神を認めず背徳的に生きたりするとね。それは受けた教育にもよるけれど何よりも本人の意志によるところが大きい。なにせ神様は人に理性と自由意志をお与えになったからね、人は自ら選べるんだ、善いものか、愚かなものか、を。

　一体なぜ世の中には、神様を認めない人々がいるんだろう。その理由は様々だが、その最も大きな理由は誰もが宗教について正しく見極める可能性を持っているわけではないってことだよ。ある人は怠け心のせいで真剣な問題を払いのけてしまう、本来なら深く考える代わりに。時として信仰を持つ者に対する恨みが、神様へ向かうことをさまたげてしまう、だって個人的な恨みつらみと真理の良し悪しとを区別できない人は多いからね。

　それにこんな人も少なくないな、信仰を持つ人はすべて無知な人だと幼児期に吹きこまれて、成長後にもそう教わったことを正しいかどうか確認しない人。しかし人間には何か高尚なものの前で敬虔になる気持ちが植えつけられている、だから神を信じない人はその神の場所に何らかの偶像を置いて拝むんだ、その偶像は科学かもしれないし、芸術とか人類の未来とか、またはヒトラーとか毛沢東かもしれない。だけど心の深い部分では真実の神を求めているのさ。そういう人には同情しなきゃいけないね……」

　マチュヒンは考え込みました。田舎に住んでいた幼い日のこと、復活祭や教会の鐘の音が思い出されました。教会に連れていってくれた祖母の隣に立ってパチパチ燃えるロウソクを見、十字を描いて頭を下げるおばあさんたちの姿を見ているのが好きでした。香炉の香りが好きで、イコンに描かれた薄暗い顔ときらきらした服を着た神父さん、ボクが十字架接吻に行くと頭をなでてくれたっけ……。そのあと成長して町に行き、学生になった。すべて忘れてしまったかと思っていたけど違った。何かが心の中に残っていて、いま火がついて応えている……。

　学生時代に与えられた本は神の世界創造を固く信じる学者に関する本が多く、

曾祖父との面会

天使の静寂

創造主を拝む学者が大勢いました。マチュヒンの心に残ったのはイギリスの学者フレミングという抗生物質ペニシリンの発明者でした。フレミングはたくさんの賛辞を受けた大集会でこう表明したのです。「皆さんは私がなにか発明したとおっしゃいましたが、それは正しくありません。実際にただ見つけたのです。見つけたものは、神が人間のために創ったものであり、私に開かれたものでした。誉れと光栄は神に帰すべきで、私に帰すものではありません」。

　また最近、西欧で出版された『われらは信ず』という本を読む機会がありました。現代の学者五十三名（その中にはノーベル賞の受賞者も少なくない）が神への信仰を話しており、信仰が偉大な発見の手助けとなったと書いてありました。マチュヒンはその内容にたいした意味を見出していませんでした、ダーウィン主義を固く信じていたからです。しかしよくよく考えてみると……。

「実際、」とマチュヒンは今考えていました。「ダーウィン主義では蜂の能力と働き方についてどう説明できるのだろう。確かに蜜蜂は自分たちで役割分担をするんだ。巣の造営係もいれば、蜜の採取係もいる、巣箱の防衛係もいれば、掃除係もいる、女王蜂だけが卵を産んで、雄蜂はただ蜜を食べる専門。どんな方法で、蜜蜂はこれらの能力をどれもこれも身につけていくのだろうか……。

　狼から生まれるのは狼の習性をもつ狼、羊からは羊の性格の羊、これは単純で分かる。白樺の種からは白樺が育ち、大豆からは大豆、これも自然なことだ。狼も羊も子孫には自分の性質を遺伝させるし、植物も固有のまたは人工接種の性質を遺伝した萌芽や果実だけを実らせる。しかしもし狼がワシのように飛んだりウグイスのようにさえずったりしたらこれはものすごい奇跡だ。あるいは白樺の種からバラや菊が育ったりしたら……。そしてこれらの奇跡はダーウィン主義を根底からくつがえすことにならないだろうか。でも蜜蜂はまさにそういう信じられないような能力を発揮しており、その能力は現代のどんな理論でも説明がつかない……。

　ここに何らかの超自然の力が参与していることを見ないふりはできない。そう、この力は存在する、そしてこの力が最も長けた人間の頭脳でも解せないほど理に適っていることは疑う余地もない。しかもそういう奇跡は全宇宙に何百万とある……。それに比べたら蜜蜂の知恵など大洋の一滴にすぎない……」。

マチュヒンは、思いにふけっている間に始まっていたデミヤン・ルキチと小学校校長との討論に耳を傾けました。校長は生物学の教師でした。

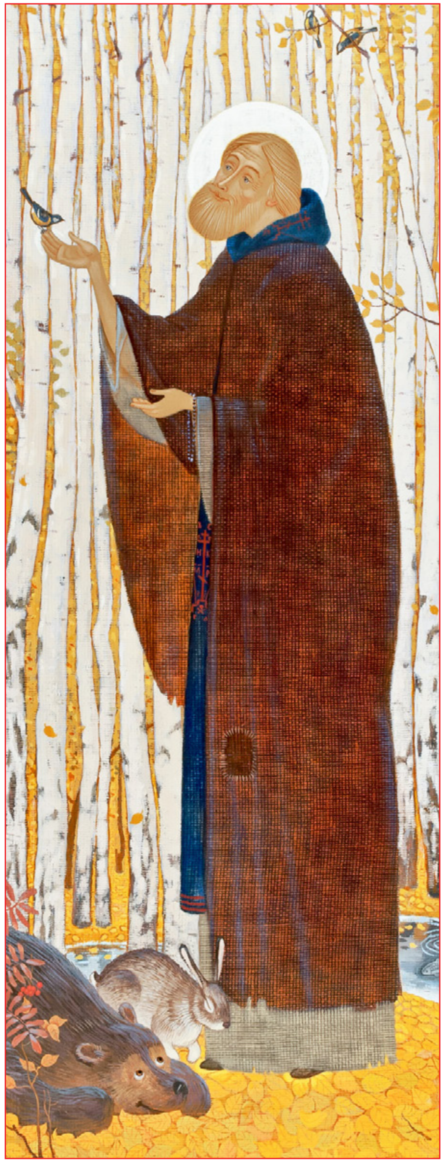
「自然界はすべて合理的に造られているよね。違うかい」とデミヤン・ルキチは校長に問いました。「でも疑う人がいる。この点はどうも基本設計されていない、とか言って、しかもそれを神のせいにしてしまう。だけど悪いのは神じゃなくて私たちの愚かさだよ」と言うとデミヤン・ルキチは何か思い出して微笑みました。

「ある不信心な男がいてね、まあなんとなく畑に入ったそうだ。そこに生えていたカボチャを見てね、見ながらこう思った。『しかしまあ、一から十までなんて間抜けな造りだことか。こんなにどでかいカボチャのくせに、こんなにかぼそい枝。つくづくナンセンスだよ、まったく』。その後、森へ行ってナラの木の前に立ち、眺めながらまたもや批判し始めた。『なんだって、木がバカでかいだけじゃなく幹も太っちょ、なのに枝に生るどんぐりときたら飴粒サイズ。所詮、どうってことないね……』。そしてナラの木の根元に寝転んだそうだ。すると突然、どんぐりが枝から落ちてきて鼻に当たり、あやうく血が出そうになった。びっくりして飛び起きた。『主に光栄』と思った。『もしこれがカボチャだったら、ぽっくり逝ってたかもしれん』」

ホールは一斉に笑い声に包まれました。

「つまり万物はいたって賢明な造りってことさ……。ところで君こそ説明してくれないかい」とデミヤン・ルキチは校長に頼みました。「鳥の教師は誰だろか。鳥はうちらの国から飛び去って暖かい国へ何千里も、野を越え山を越え、森を越えて海を越えてもなお迷子にならない、でまた夏になると帰ってきて自分の巣を見つける。誰が鳥に道を示しているのだろか」

「それは鳥の習性による行動です」と校長は答えました。「すでに講演者があなたに余すところなく説明しましたよ、習性は遺伝によって受け継がれるものだ、と。何千年も前、鳥はある行程を行き来することに慣れたのです。その習性が本能となり、前世代から次世代へと受け継がれて



オブノルの克肖者聖パウエル

いるわけです」
「いや校長先生、それこそ本題じゃないことを話しているよ」とデミヤン・ルキチは反論しました。「私はその、もう六十年以上もこの足で歩き、願わくは神様が与えて下されば死ぬまで歩きたいと思っている。父も歩いたし祖父も——そしてアダムという人類の父まで——みんな歩いたさ。しかし私のもとで息子か娘をもうけてごらん、一年二年は教えなきゃならないね。習慣は生まれつき受け継がれてこないわけさ、一人ひとりの赤ん坊を初めっから教えなきゃダメだ。

ところがだ、ヒヨコちゃんを見てごらん、卵を割って出た瞬間から走り出す、アヒル君なんて泳ぎ出す、誰もそれを教えちゃいないのにだよ。理性をもった人間でさえ習慣を子供へは伝えられないのにさ、生後すぐヒヨコみたいに走れるようにしてあげられないのにさ……。私たちの祖先はそりゃもう何年くらい歩いたことか。例えばヤレドは九六二年生きた、メトシェラは九六九年（訳注：ともに旧約聖書からの引用）。もし鶏が同じくらい生きたら、奴らは卵のまま走り出すに違いない」

ホールではまたもや笑い声が聞こえました。校長でさえ微笑みました。

「何を笑っているのだい」とデミヤン・ルキチは校長を責めました。「これはあなた方の教えによるとそうなってしまうのだよ……。ほれ説明してみておくれ。なぜ人間は歩く習性を備えて生まれて来ないのだい。人間の祖先は何千年も前から歩いてきたのにだよ。鳥なんか一回でも暖かい国から帰ってくればその子らはすでに道を知っていて、標識なんぞ一切合切ない中を訓練もせず飛んでいってまた帰ってくることができるのに。どうやって鳥は知ったの」。

「そういう性質なのです」とかろうじて校長は答えました。

「誰がこんな知的な性質を鳥に与えたんだい。その性質は人間でさえ持っていないのだよ。君だって学者とはいえ恐らく行ったことのない村では迷うでしょう、ガイドがいなければね。またはパイロットにして飛行機に乗せてみようか、地図も持たずに飛べるかい。でも鳥はまだ一歳にもなる前から——ちっぽ〜けなおツムだよ——森や荒野を何千里も飛んで、海山越えても迷子にならんさ。それだけじゃない。帰ってきて自分の巣を見つけるんだ。一体、誰が教え

奉神者

たんだろか。お願いだから説明しておくれ、だって先生なんだから知らなきゃ……」と言ってデミヤン・ルキチは口をつぐみました。

「そうそう、あるとき森の中を知人と歩いてたときのことだった、突然、鳥が騒ぎ出した音が聞こえた。何が起こったのだろ。よく見ると大きな蛇が木をよじ登っている。で上の方では巣の中にヒナが数匹いた。鳥はどうやってヒナを守るんだろか。

するとそのとき一羽の鳥が飛び去ってすぐに帰ってきた、くちばしにちょっとした小枝を数本くわえてね。で巣に投げた。蛇は、巣に着いてちょうどその中に頭を入れようとしたところだった――が突然、巣から飛び跳ねて落っこちて、しゅうしゅう言ってただただ震えてる。で、すかさず隠れ去った。あとで分かったのだけど、鳥は蛇が怖がる有毒植物を持ってきたのさ……。ほれ言っておくれ。鳥ちゃんはどんな科学を勉強したのだろか、どこどこ大学の出身だろか。蛇にはこの植物が確かな死を意味することをどうして知っていたのだろか」

「さっき言いました。自然が鳥にそのような能力を与えたのです」とイライラしながら校長は答えました。

「自然、自然、」と言いながら責めるようにデミヤン・ルキチは首を振りました。「あなた方にとっては、すべて自然と習性なんだね。もし自然がそんなに利口ならば、そんなに全能ならば、一体

なぜ『自然』と呼ぶんだい。だったらもういっそ自然神とでも名付ければいいのに。そうだ、あなた方にとって自然とは神なんだ……」

「うちのトロフィムはね」と、近くにいた孫をあごで指し示しました。「違う風に育てられたよ。この子が幼かったころあるとき畑に連れて行ったさ。『ごらんトロフィム、この花壇は君のもの、ここに好きな植物の種を撒いてごらん』。しかし気付かれんように、その花壇に早生の草の種を撒いておいたんだ。ちょうど咲いたら名文字で『トロフィム』と読めるようにね。

でほれ、この子は突っ走ってきたさ、『おじいちゃん、早く来て、見せたいものがある』、で私を畑に引っ張った。『見て、ボクの花壇にボクの名前が実ったよ。誰がやったんだろうねえ』。『ああ、これはたぶん自然がやったのだろ』。『どうやって自然がやるの』。『なに、花壇が自分で書いたまでさ』。『まっさかあ嘘だ。ボクの名前を花壇が知ってるわけないでしょ、これはたぶんおじいちゃん、おじいちゃんが仕組んだんだね』。『そう、私じゃよ』と白状せにゃならんかった。

で言ったさ、『よく覚えておくんだよ、世の中はひとりでに生じるものは何もないのだよ。この草はおじいちゃんが花壇に植えた。なぜなら手元に種があったからさ。でも私たちの長い冬の間、こうして草花の種を撒き、森林を植え、川を引いて山を動かしているのは誰だろうか』。『誰って何さ。もちろん神様だよ』。ほれ見たかね」とデミヤン・ルキチは校長に顔を向けました。「こ

んな子供でも分かってる、でもあなた方の考えではこうなっちゃうのさ、自然は賢者の中の賢者であり、学者でさえ持っていない英知を蜂にも鳥にも教え込んできたのだ、ってね」

校長は手をひと振りしました。まるであんたとは何を話しても無駄だと言わんばかりでした。そしてそのまま席に座りました。アルトシューレルは再び勢いよく止めに入りました。

「あんたはなにを一晩中、蜂だの鳥だの騒いどるんですか」と怒って叫びました。「本題にそって話して下さい。でなければ公開討論会を打ち切ります」

この脅しは皆を不満にさせました。人々はざわついて落ち着かなくなり、それはちょうど天候の悪い海のようでした。

「答えろ！　質問に答えろ！」というしつこい叫び声が波打っていました。

「ははあ袋小路に入ったね、無神論者め、もはや抜け出れんよ」と前方に座っていた誰かが冗談を言いました。「あっちは蜂に刺され、ほら隅っこでしょんぼり座ってる。こっちは鳥につつかれ……」。

「答えろ！　答えろ！」と、ホール全体が揺れていました。このヤジによって硬直状態から呼び起こされたマチュヒンは演壇に登りました。

「私は言うべきことがあります」と表明しました。「私たちが知る限り、自然は人間とは異なり理性を持っていません。私たちには意識があります。つまり私たちは、自分の言動や行動を自覚したり思案したり判断したり決断したり、その決断を変えたりすることができます。こういうことは自然にとっては無縁です。自然は、自らしていることを判断せず思案せず意識していません。自然は、理性がなく愚かなのです。自然は――盲目なのです。」

「ありがとう、このような答えに対して主が君を救って下さいますように」とデミヤン・ルキチは応じました。「つまり人間は自然よりも賢いってことかい」

「もちろんですとも。それをいま申し上げたのです。ただ賢いだけではありません。人間は自然を服従させ、自分に都合良く働かせています。人間は自然の支配者です」

「支配者ですって」と微笑みながらデミヤン・ルキチは言いました。「ある賢い長老が言ったさ。『人間とは小さなコガネムシのようだ。暖かい日にお天道様が

下り坂を下へ

照ると彼は飛ぶ、自慢してブンブン唸る、『全部ボクの森、全部ボクの草。全部ボクの草、全部ボクの森』。でも太陽が沈んで冷気がおりて風がそよぐと、コガネムシは自分の威勢をすっかり忘れ、葉っぱにぴたりと身をよせて身震いする』……」

「確かに」と言って誰かが客席でため息をつきました。「僕らってそんなもんさ、人間って……」

「もし人間が支配者ならば」とデミヤン・ルキチは続けました。「ほれ、次の点を教えておくれ。人間は例えばこうして私たちが話し合うような機械を作れるだろうか」

「単に作れるだけではありません。もうすでに作りました」とマチュヒンは喜んで答えました。「まさかご存じないのですか、もうだいぶ前から話して歌う、しかも歩く機械がありますよ、マイクとかそういう類のものです」

「そういう類のものを問うているんじゃないよ。マイクとかは自ら話しているんじゃなくて、人がそれらを通して話してるのだから。訊きたいのは、人間は自ら考える機械を作れるか否かさ……。ほれトロフィム、こっちへおいで」とデミヤン・ルキチは孫を呼びました。

「この少年をごらん」と愛をこめてトロフィム君の頭をなでました。「この子の父は耳も聞こえず口もきけないけれど、生まれた息子は耳も鋭く舌もよく回る。父の聾唖の性質は息子に受け継がれなかったのでね……。トロフィム君、私たち石頭のジジたちへ教えてくれないかい、君はどのように神様を思い描いているのだろか」

トロフィム君は大きな声で真剣に答えました。

「神様はあまりにも偉大な方なので、天も地も神様を収めることはできません、と同時に神様はこんなに小さくてここに」と言ってトロフィム君は自分の胸を指差しました。「ボクの心にいるのです」

みんな、あーっと叫びました。「これはこれはトロフィムちゃん。なんてなんて答えでしょう」

ところで、トロフィム君は小学校で神への信仰を擁護したのでした。先生は、信仰とは無知で無教養な人々が自然現象を説明できずに編み出したものだと吹き込み、「神はいない！　神はいない！」と声をそろえて元気よく復唱するよう生徒に強制しました。そしてカバンから小さなイコンを取り出すと端っこへ投げて言いました。「さあみなさん、あいつに唾を吐きかけて言ってやりましょう、『神はいない！』と」。全員オウムのようにそれをしました、ただトロフィム君だけがまじめな顔で座ったまま黙っていました。先生は彼に近寄って言いました、「立ちなさい。なにあんた自分は関係ないとでも思ってるの。なぜ唾を吐きかけて神はいない、と言わないのですか」。

傷ついた心

少年は立ち上がり、少し考えてから答えました。「だってマリヤ先生が神はいないと言うものですから、だとしたら唾を吐く相手は誰になるのでしょうか。それはそうと、もし神様がいるのなら神様にはまじめに慎ましく接するべきで、神様は愛さなければいけません」

「なにお前、神を信じてるのか」とアルトシューレルは少年に聞きました。

「信じています」と大胆にトロフィム君は答えました。

「なんてことだ。まさか君たちは学校で教わらなかったのか、神はいないと。宇宙飛行士が宇宙に飛んでも神を見なかったことを教わらなかったのか」

トロフィム君は少し考えてから真剣に答えました。

「低く飛んだのです」と言ってから付け加えました。「それに神様はこの目で見るものではないんです。心の清い人だけが見えるんです……」

「こりゃまあトロフィムちゃん、頭のいい子、まるっきりおじいさんと瓜二つだ」という声が響き渡りました。「大きくなったらすごい人になるぞ」

「ともあれ、教えてもらえないかい」と再びデミヤン・ルキチはマチュヒンに向き直りました。「人間はこの少年のような理性をもった機械を作ることができるだろうか。人間は君の説明によれば自然よりも賢いそうじゃないか」

マチュヒンはすぐに予想できませんでした。今度はどの方向から攻め込まれる恐れがあるのでしょう。

「科学の進歩は目覚ましく、一つひとつ発見するたびに人はますますより多く知り、威力を発揮するようになっています」と彼は答えました。「つい先日までは無理で実現不可能と思われていたものが、今日では当たり前の現象になっています。もし私たちの祖先がいま復活したとしたら、今の時代は奇跡として目に映ったことでしょう。現在では何千キロも離れたところにいながら会話をし、お互いに見ることができ、海の底を泳ぎ、月に飛び、さらに高みへと飛んでいます……。いずれ自主的に考え、自主的に話す生命体を創れる時代が来ると信じなければなりません……」

「そりゃいい時代が来るね。工場に行ってほしいだけ自分の子供を注文すればいい。で蜂は、創らんかね」と、デミヤン・ルキチは皮肉っぽく言いました。

けれどもマチュヒンはまっすぐに答えました。
「科学は万能です。人工の蜂も創るようになるでしょう」
「じゃどうして今すぐ創らないのかね」
「人間はまだそこまで至っておりません」
「でも愚かな自然は至っているんでしょ」と言ってデミヤン・ルキチは致命的な質問をしました。「とどのつまり、人間と自然、一体どっちが賢いのかね」

昼に灯火と（断片）

ついぞマチュヒンはもう抜け道のないことを悟りました。何を答えようか思いをめぐらしました。実際、確かに物質が、自然が、人間よりも賢いことになってしまうのです。自然は何百年も以前から、人が優れた科学知識の進展にもかかわらず今もなお創れないものをずっと造り続けてきたのです。人は虫けらですら創れないのに、自然は人々を造っているのです。
「見よ。蜂と鳥がどこへ導いているかを」と誰かが指摘しました。
「言わずと知れたことよ、ルキチはいたずらに懲らしめちゃいないさ」と他の人が賛同しました。
「彼の頭はずば抜けているもんね」

「ぎりぎりの論点まで引っ張るもんな。ルキチにつかまったら逃げられんよ」
マチュヒンにしてみれば、自然界の上に全能の理性があるということに同意するほかありませんでした。つまり神の存在を認めるか、または自然自体を鳥や蜂や人間すら生み出す神として認めるほかありませんでした。けれどもマチュヒンは今しがた述べたばかりなのです、自然は無意識で盲目であり理性的な人間よりもはるかに低次元なものだと……。どぎまぎし自分の無神論への信頼が揺らぎながら、マチュヒンはすでに自分の信じていない、いつも通りの答えを言いました。
「とっくに説明しました。自然界ではすべて少しずつ進化し完成し必要な条件に適応していく、と。生き残りをかけて皆が皆、常に競争しているのです。競争の結果として動物には新しく有意義な器官が生じるのです。物質は徐々に進化していきますので、その過程は母の胎内の胎児の発達と似ています。これこそ進化論です……」
「では母の胎内に胎児がいなかったら」とデミヤン・ルキチはさえぎりました。「君の、その進化論は起こるのかい」
「もちろん起こりません」
「つまりすべては何かから始まる必要があったわけだね、誰かが太初の細胞を創らなければならなかったわけだ。たとえあなた方の考え方で論証するとして、世界は単純なものから複雑なも

のへと進化したものとしても、それでもやはり神を認めざるをえないわけさ、神なくどんな生命体も出現できなかったのだから。人間もね……。どうも力説してやまないねえ。生き残りをかけた労苦、労苦が人間を造った、と。だが現実はこうさ。ラバ（頑固者）は何年労苦してもちっとも賢くならん、相変わらず、知らばっくれて頑固者さ」

自然界の合目的性

聴衆は肯定的に笑いました。アルトシュールレルは赤面してやや立ち上がりかけました、何か言おうとしたようでしたが思い直しました……。

「せめてよく見てごらん、どれほど英知にあふれて何もかも造られているかを」とデミヤン・ルキチは感嘆して叫びました。「本で読んだよ、人間の細胞とは母胎の中で――それはとがった鉛筆で紙の上にちょこんと打った点と全く同じだ、と。で、そのちっぽけな細胞の中に自然の法則が埋め込まれているわけだ。どんな法則か。人生の法則だよ、食事、生殖、遺伝、性格、死、等々。その他にもこの細胞の中に頭、目、手、足、つまり未来の人間に必要なものがあれもこれも存在するんだ。しかし言ってみてくれ、まだ母胎にいる人間に目や手や足が必要だろうか」

「必要でしょう多分」とマチュヒンはぼそっとつぶやきました。

たそがれざる光。至聖三者聖セルギー大修道院（現在の眺望）

「なぜそこで必要なんだい。それとも胎児は胎内で何か見たり歩いたりしてるんだろうか」

「そうですねえ、では必要ないとしましょう」とマチュヒンは訂正しました。

「じゃもし必要ないなら、なぜ目や手や足があるんだろうか。それらは何に適応したのさ。どんな競争が、母胎でそれらを創り出したんだい」

「いやそれらはすべて赤ちゃんが生まれてから必要になるのです……」

「つまり細胞を創った建築家かつ技術者が先を見通して、赤ちゃんが生まれてからこれらの器官がすべて必要になる、と知っていたわけだ。あるいはもしかして自然がこれをすべて予見して造ったのかね。しかし自然はどこから知ったんだろう。人間には見るために目が必要、聞くために耳が必要、歩くために足が必要、呼吸するために肺が必

要ってことを。どうやって自然がこれらをすべて創れたんだろか、もし自然自身がこれらを持っておらず、もし自然に理性がないのならば」

マチュヒンは黙って首を垂れていました、でもデミヤン・ルキチは続けました。

「目だけでも見てみようよ。なんて驚くべき部品、でも母胎ではどんな競争もなくでき上がってゆく……。これって本物の奇跡さ。これって水のないところで泳ぎを学ぶことと同じ、空気のないところで呼吸を、または脳のないところで思考を学ぶことと同じだよ。実に奇跡じゃないか」

ホールではまたもや賛同の声が上がりました。

「いやはや賢い老人だ」

「さすがルキチ、たいしたもんだ。すっかりこの煽動家らをやり込めたね」

しかしデミヤン・ルキチは追及の手をゆるめません。

「教えておくれ、目は合理的に創られているかい」

マチュヒンはデミヤン・ルキチにからかわれているのかと思いました。

「もちろんですとも」とイライラして答えました。「それを知らない人なんかどこにいますか。目の合理的な構造はすべての学者にとって衝撃です」

「では何のためにこのような構造なんだい」

この質問もマチュヒンには嘲笑に思われました。彼はいつもの親切な語調すら忘れてしまいました。

「なんてアホな質問をするんですか。本題にそって話して下さい」と言いながら実は心の中で考えていました、このお爺さんはまたなんらかの罠を仕掛けているんじゃないか、と。しかしそれでも答えました。「誰でも、幼い子でも知っています、目は見るために創られているのです」

「ご名答じゃ」とデミヤン・ルキチは褒めて言いました、まるで先生が見事な解答をした生徒を褒めているかのようでした。「ならば次の点を答えてくれ。目を創った方は何のために目が必要なのかを知っていただろうか」

「知っていたと考えるべきでしょう。がしかし……」と急にマチュヒンは気づきましたがすでに遅かったのです。

「その通り」とデミヤン・ルキチはまた彼を褒めました。「ところで目を創ったこの方は理性的な存在、つまり炯眼な『存在』だろうか。それとも盲目な『存在』だろうか」

理性的な存在——創造主

そうです、マチュヒンは実に抜け出がたい罠にかかってしまったのです。うっかりとはいえ目を創った『存在』が何のために目を創ったかを知っていた、と言った以上、その『存在』を盲目

な自然界と名付けることは考えられませんでした。自分が何をし、何のためにそれをしているかを認識する者にはもちろん理性があります。ならば目を創った『存在』には理性があり、かつ意識があるということです。デミヤン・ルキチの質問はなんとも明瞭で説得力のある論拠に基づいていたため、この質問へ答えるには次のように公認するほかありませんでした。この『存在』とは理性と意識を持つものであり、すべてを見通す存在だ、と。マチュヒンもまさにそう答えるほかなかったのです。

「はい」と彼は言いました。「目は

ありえない！

理性と意識のある力によって創られました」

「では人間は目を創れるかい。生きていて見える目を」

「科学はまだそこまで発達しておりませんが、恐らくいつか創るに違いありません。なぜなら目は一種のカメラみたいなもので、カメラのように周囲の世界を映し出しているにすぎないからです」

「ではどちらの方がより賢いんだろう、現在まで目も創れず既成物すらろくに理解できない『科学』か、それともこの驚異的なカメラを創った『存在』か。すべてを見通す方だから、視力を与える。すべてを聞き入れる方だから、聴力を与える……」

マチュヒンの動揺

マチュヒンはデミヤン・ルキチが賢く冴えた質問によってどこへ導いているかをよく理解していました。それらは神の認定へ導いているのでした……。マチュヒンは自分の心に何か変化が起ころうとしているのを感じていました。時に考え込み、時に恥ずかしく思い、そして動揺していました。公開討論会から逃げ出そうかと考えたり、対話者の無遠慮でしつこい質問に一矢報いるような回答を集め直そうかと考えたりしていました。あるいはいっそ決意して、神はいるとはっ

家は火事、でも眠り続けるイワン

きり言っても良いかもしれません、ただ神を理解することはできませんが、と……。

なぜ明らかな真理に逆らう必要がありましょう。頭にはこんな考えがひらめきました。「無神論とはなんて愚かな考えだ。なんたる闇。無神論は人間の本性に反して不自然で恐ろしい……。なんだか死に絶えた砂漠、暗い深淵、目的もなければ基盤もない。これはめったやたら打ち砕かれた虚無感だ、でその上には何も……」。そしてこの向こう見ずな虚無感に対して身震いをおぼえたのでした。

デミヤン・ルキチの最後の質問に対し、マチュヒンはわずかな信仰のひらめきをもって答えました。

「はい、それは理性ある『存在』です」

「誰ですか、一体その『存在』とは」

「それは神秘的で認識しきれるものではなくて、そして……」と言って黙り、決意をもって発言しました。「超自然の、力です」

実のところ、これはすでに神の認定でした。

アルトシューレルの逃走

文化会館のアルトシューレル館長は注意深く対話を見守り、この対話がどこへ向かって進んでいるかをずっと前から分かっていましたので、もうこの対話を終えるべきと決断しました。

「ご案内します。公開討論会はこれにて終了しました」と宣言しました。しかし人々は解散する気などさらさらありませんでした。マチュヒンですら一歩も動じません。アルトシューレルはマチュヒンに怒りの目線を送りましたが、彼は振り向きさえしませんでした。

「今すぐこのホールを空けて下さい」とアルトシューレルは要求しました。「でなければ力ずくでも移動して頂くことになります」

だしぬけにこう脅迫するとアルトシューレルは机から離れて舞台を降り、歩きながらコートと

帽子をつかみ取るとホールから走り去ってしまいました。みんな黙ってその後ろ姿を見ていました。そして見えなくなるやいなや、その存在を忘れてしまいました。

　世の中にはアルトシューレルのような人々がいます。そういう人は何をもっても説得することができません。もし彼らにハリストスご自身が現れてご自分の傷を見せ、「苦しみを受けたのは君のためだ、血を流したのは君を永遠の滅びから救うためだ」と言ったとしても、その人は信じず、きっと医者に行って「どうも幻覚を見るようになった」と言うでしょう。

　神の存在を否定する〝学者肌の〟無神論者は全く耳が聞こえない人に似ています。その人は生まれつき耳が聞こえないので必死に証明します、バッハやベートーヴェンやモーツァルトの音楽とは死んだ黒いおたまじゃくしとひげ以外の何物でもなく、音符が五線紙の上に散らばっているのは誰が何のためにしたか分からない、と。しかしこの耳の聞こえない人の言い分に対して、普通に耳が聞こえて素晴らしい音楽を楽しんでいる人が納得することはまずないでしょう。そうです、そのような〝聞こえない〟人々にはただ同情することしかできないのです……。

　全員、討論がどう終わるのか首を長くして待っていました。老人に軍配が上がっていたことは明らかでした。しかし講演者は折れるでしょうか。負けを認めるでしょうか。

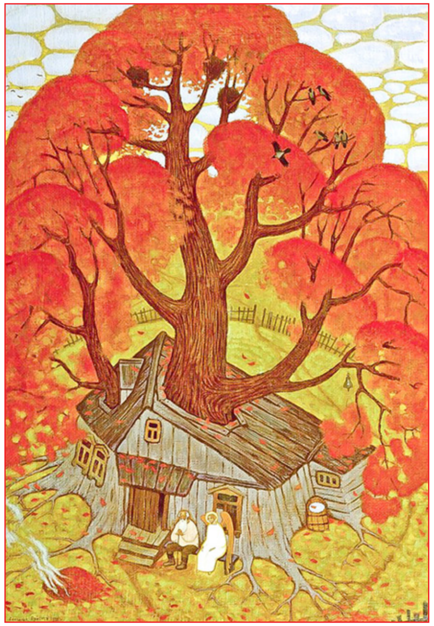
　マチュヒンは演壇を降りずに留まっていました。彼自身、新たな角度から真剣にこの対話に興味を抱き始めていたのです。なぜなら今日まで担ってきた主張とは単に言い古された無神論の〝真理〟であり、その真理は冊子から冊子へ、講義から講義へ渡り歩いてきた代物にすぎなかったのです。一言で言えば、他人の借り物の言葉をしゃべってきただけなのです。

　マチュヒンは真心から科学が全能であると信じ、科学がいつかすべてを説き明かして意味を明かすだろうと信じていた人でした。しかし近年、科学の危機と呼ばれる事態があることを一度ならず見聞きしていました。科学では十年前に反論不能と思われたことが、今日では同じ科学でもって反論されているのです。ということは科学を完全に信じてはいけないのでしょうか。そうです、この老人が言った通りです、「学者は自然界にある法則を制定しているのではなくてただ発見しているだけなのさ」と……。

　もちろんこの老人ほど恵まれた生き方もないでしょう、すっかり神様を信じきって神様によって生きるのみ……。

奇跡的で複雑な有機体

デミヤン・ルキチは思いやりある優しい微笑みを浮かべてマチュヒンを眺めていました。「ご



家と樹木

らん、例のアルトシューレルと一緒になって逃げ出さなかった。明らかに頭も鈍くないし、いい人だよ、ただ脳ミソを曇らされていたんだ……。でも心は真実を探している、真実を感じ、光を求めてもがいている……。主よ、この人を悟らせたまえ」。

「マチュヒンさん、私たちにわかりやすく話してくれないかい」と、やわらかくデミヤン・ルキチは頼みました。「有機体はどのように創られているのだい」

マチュヒンは軽く咳払いし、少し考えてから語り始めました。

「科学は解明しました。あらゆる生命体は、それが植物であろうと動物や昆虫であろうと非常に多くの細胞から成り立っています。レンガ造りの家がレンガごとに分解できるのと同じように、学者はあらゆる生命体を分解することができます。これを解剖と言います。

例としてスーツを見てみましょう。スーツは部分ごとに裁断できます。すると裾、袖、背、襟、

ポケットという風に別々になります。ちなみにこの部分を糸にまで分解し、さらに一本一本の糸を細い繊維にまで解きほぐすことができます。すると使われた部品や材質、それに裁縫法を見抜くことができます。同じことをどんな物体や品物にも適用できます。このような方法によって自然を調査した結果、植物も動物も肉眼では見えないほど小さな多数の細胞によって造られていることが突き止められました。細胞を見分けるために使う特別な装置が顕微鏡です。顕微鏡を使えば徐々に生物へと成長していく胎児や胚芽の細胞も見ることができます。先ほど正しくご指摘されたように、この細胞の中に設計図のごとくもう何もかもが存在するのです。生物の外形も、本性も、特質もです」

全員、注意深くマチュヒンの論考を見守っていました。

「ご存じでしょうか、どれほど人間の胎児の細胞が取るに足らない小さなものであるかを。でもその中にもう人間がいるのです、しかも四肢も臓器も感情も能力も才能も、種族や家系の遺伝的特徴もくまなく備えた人間が……。その上、胎児の細胞は多数の分子の結合によって形成されていることを知るべきです。分子はそれぞれ一定の場所に配置され、人体の形成のためにどれも必要なのです」

「ところで細胞は、どんな物質から創られているのかね」

「色々な物質で造られています。生物の細胞の中には炭水化物、酸素、水素、窒素、硫黄、リン、

塩素、カルシウム、マグネシウム、鉄、糖、澱粉、その他諸々の要素が入っています。細胞とはこの上なく混み入った結合体なのです」

「ああ神よ、これはなんと奇偉なることか」と感嘆してデミヤン・ルキチは叫びました。「つまり、一つひとつの細胞は家と同じだね、色々な物質で建てられた奇跡的な家と言ってもいい」

「まさにその通りです。ただ一つ違いがあるとすれば、細胞は最も豪華な宮殿よりも複雑でより巧妙にできているのです」

「では誰がそれほど奇跡的な細胞を創ったのだろか。誰が細胞の建築家で、誰が大工さんだい。誰がその細胞に命を吹き込んだのだい」とデミヤン・ルキチは問いただしました。

誰が細胞を創ったか

「学者はこの分野で多くの研究成果を上げています」と再びマチュヒンは常套句で答えました。「生物学は大いなる進歩を遂げました。だいぶ以前からすでに胎児の細胞の構造と構成、その分裂による増殖方法が明らかにされております。これはきわめて複雑な過程なのです……」

「それは君、完成した細胞についての話だよね」とデミヤン・ルキチが止めました。「私が聞いているのは、人間は丸っきり初めから細胞を創れるかどうかだよ」

「その分野における試みは今のところいかなる結果ももたらしておりません」とマチュヒンは認めました。「こう言う学者がいます。細胞を創るのは生きた馬を創ることと等しいくらいに難しい、と。しかしタンパク質を人工的に創ることには成功しています。タンパク質は基本的な有機物質です。これはとても重大な成果です……」

「しかし私が思うに、そのタンパク質と生きた細胞とでは雲泥の差だ」とデミヤン・ルキチは再びマチュヒンをさえぎりました。「最近読んだのは、ある実験所があってな、そこでは知恵を絞って細胞を化学物質から創ろうと躍起になっておるそうだ、で、もし成功すれば世界的な大事件になるという……、ところがどっこい成功しない。すぐ手元に米と水があればおかゆ

福者（断片）

を作るのは簡単さ、――ためしに何も無いところからおかゆを作れるかい。ところが細胞の場合では手元に材料はすべてそろっているわけだ、漏れなくある、なのにおかゆったらできあがらない……」

「とはいえ科学は多くのことを成し遂げました」とマチュヒンはどうにも負けたくありませんでした。「今、例えば多くの大学で人工食糧を造る研究がされています。もしかしてすでに人工キャビアがあることをご存じでしょうか」

「ご存じさぁ」とデミヤン・ルキチは嫌そうに手を振りました。「でもその人工キャビアをどうにかこうにかパンにのせることはできたとしても、魚は、教えてくれ、そのキャビアから孵るのかい」

「無理ですよ、もちろん」とマチュヒンは微笑みました。

「人工の米粒を創ることもできるでしょう、そいつをこねて餅にすることもできるね、でもそんな米粒を田んぼにまいたって育ちやしないさ。なぜだい。なぜならその米粒には命がないからさ。死んでいるのさ。命を万物にお与えになるのはただ神様だけだ」

マチュヒンは黙しました。もう自然が細胞を創ると言いたくありませんでした。彼自身すでにこの使い古された理論を信じていなかったのです。

でも結局、誰が細胞を創ったのでしょう。誰がこの世を創ったのでしょう。なにしろかのマチュヒン自身すでにこう認めたではありませんか。理性的な創造的な力というものが存在する、それなくして世界もその中のすべても出現しえなかった、と。もう一度この点を言いましょうか。しかし、まだためらっていました。新しい思考回路で考えることが難しかったのです。

「人工心臓も、作れるだろうね」とデミヤン・ルキチは熱く語りました。「でもその中に愛は生まれないさ、愛は誰一人として決して作れないよ。もしかしたらそれこそ人工脳だって作り出すかもしれない、でもその脳は考えるようにはならないさ。でき上がるのはただ魂のない死んだ物質だよ。生きて思慮深い物質にするには神の霊の力だけが可能なのさ」と言ってデミヤン・ルキチは黙りました、そして冗談っぽく笑って付け加えました。

「あなた方は化学と共に、人間まで合成物のようになっちゃったんじゃないかい。干からびてる、まるで乾パンみたいに」

マチュヒンは苦笑いしました。その心には相反する感情が戦っているのが見えました。「そうです」と彼は思いました。「二十世紀は原子の世紀、無線電子工学、放射線技術、生化学の時代です……。しかし科学はこの世を創った方と張り合えるだろうか。科学は原子すら創れなかった、

しかし創造者は何百万もの銀河を創った……。科学には昼夜の輪番や季節の交代を変える力はない、そして……、そうこの老人は正しい、科学は決して蜂一匹も鳥一羽も創ることはできないのだ」

「そういうわけでさ」とデミヤン・ルキチが言いました。「とうとう今度こそ言えるかね、だってそうやって一向に答えないんだもん。誰が最初の細胞を創ったのだい」

「最初の細胞はひとりでに現れ、自らを構成していると論証されています」と意に反してマチュヒンは答えました。

「そりゃどうやったらそうなるのさ」とデミヤン・ルキチは腰を抜かして言いました。「どうやって細胞がまだ世に存在しないときに、細胞が自分を創ることなんかできたんじゃ。変てこなことを言ってないかい、お若いの！　それは私が自分自身を産んだと言うに等しいじゃないか。自分で心臓と肺と胃を配置して、どっかから血を引っ張ってきて血管に放って、つづいて頭を乗っけて手や足も……。

しかし問われてしまうよ、私がいなかったときに私はどんな人だったのか、って。私がいなかったときとは、つまり私に心臓も肝臓も血も血管も頭も脳も手も足も体もなかったときのことだよ。私は存在しなかったわけだ、でどうやって自分自身を創るんだい。ひとりでになんか何も生じないじゃないか、何もでき上がるわけがないじゃないか……。

知ってるかい、盗賊がどう罰せられたか。あるところに農民の馬を盗んだ盗賊がいたそうだ、盗賊はつかまったが何も盗ってないとやっきになって証言する、馬がひとりでに走って盗賊の荷馬車についてきたんだ、と。『ならばどうして』と農民は聞いたそうさ。『馬を馬車につけたんですか』『いやあいつらひとりでに馬車に結いつきやがったもんでねえ』。もちろん誰も盗賊を信じず、盗賊は窃盗犯で罰せられたよ。同じように真理を認めず、世はひとりでにできたと主張ばかりする人は罰せられるだろうよ」と言ってデミヤン・ルキチは黙りました。

「同じことが細胞にも言えるさ。誰が細胞のために材料をそろえたんだい。この熟練の賢い技術者は誰さ。似たような構造のものを私たちに創らせてごらん、材料が山ほどあったってなにもできやしないさ……。

私たちは家がどんな材料で建てられるか知っている、レンガや板や丸太などがどれくらい必要か知っている。その材料をすべて持ってある土地へ出向いて申し上げよう、『さて尊敬すべきお家様、閣下のためのお支度は整いました、いよいよご自分でお建てあそばせ』。百年も待ったって建築家がいなければ家は建たず、材料もただ腐るだけだろう。でも生きた細胞は君が言うに最も奇跡的な宮殿よりも複雑なのに、細胞のための材料なんか誰ひとり持ってきてはいないよ……。

あるいは絵を描かなきゃならないとしよう、例えばモスクワの火事というタイトルの絵をね。

絵の具と画布を準備して言おうじゃないか、『さぁ、かわいい美・絵ちゃん、ぜんぶ君のためにそろえたよ、描き始めなちゃい、ただよ～く見てくれぐれもこんがらがらないようにね、必ずモスクワの火事、を描き上げるのよ、どっかのワンちゃんの尻尾とか、亡くなった門番の古ほうきとかじゃダメなのよ～』。でどうさ、絵は現れるだろか」

デミヤン・ルキチはあまりにも血気に満ちて一気に熱弁をふるったので、さすがのマチュヒンもこらえ切れずに吹き出しました。笑ったのは聴衆も同じです。ただ一人、校長はますます苦虫を噛み潰したような表情になっていきました。

自然界にある計画と法則

「それでは言っておくれ、細胞は計画的に創られているだろか、それとも手当りしだいに作られたものだろか」と、デミヤン・ルキチは聞きました。

「もちろん計画的に創られています」とマチュヒンはまじめに答えました。「計画がなければ、世の中には何も存在しなかったでしょう、あるのはただ混沌として無秩序で意味も目的もなく、ぶざまで雑多な寄せ集めだったことでしょう。しかし細胞の中に見るのは、そこには目的があり

前もって考え予見された目論みがあるということです。

私たちはあらかじめ知っています、人間の細胞からは必ず人間ができ上がるのであって木や牛ではありません、バラの細胞からはバラが育つのであってリンゴではありません。自然には厳格な法則が存在します。その法則にしたがって全世界はそのすべての現象を伴って生きているのです」

ふとデミヤン・ルキチは、マチュヒンが自分を混乱させてずる賢い手段でだましているのではないか、と思いました。ところがまさに今こそ、マチュヒンはあらゆるずるい手段を用いずに話していたのでした。

マチュヒンはより固く確信していました、全宇宙は全知全能の力が支配していることを。より強くより執拗に「一体、この力とは何か」という質問が響いていました。そして答えとして何とも内面的な喜びに満ちた声がささやいていたのでした、「神様はいるよ。神なくして何もないし何も生じえない。神様は命の原初にして創造主だよ」と。

一人ひとりの中に宗教的な感情があります、しかし無神論者たちの中ではその感情が押さえつけられゴミで包まれ、ちょうど灰の中の火花と同じような状態になっています。しかし灰を吹き払って火花に吹いてあげれば、火花は鮮やかな炎となって燃え上がることができるのです。

デミヤン・ルキチとの今日の対話はマチュヒンにとってそのような命をもたらす呼気でした。彼の心の中で宗教性の火花は消えてはおらず、対話が進めば進むほどその火花はより頻繁に発火してより暖かくマチュヒンの心を温めていたのでした。彼はこの暖かさを感じていましたのですっかり穏やかな気分になっていました。

「私は確信しています」と彼は言いました。「世界創造の計画と全宇宙を統治する法則は理性的なものです」

「神に光栄」とほっとしたようにデミヤン・ルキチはため息をつきました。少し黙ってから粘り強く付け足しました、頭と心に深く刻みこむためです。「君、このことは肝に銘じておくれ。科学だけでは神を発見できず認識できないってことを。私たちの教会は信仰の上に据えられている、でも科学は、それは杖のようなものでそれ以上じゃない……ってことを。

聖フィラレートは前世期に生きたモスクワの府主教だけど、あるとき預言者イオナについてこう質問されたことがあってね。いわく『聖書にはクジラがイオナを呑みこんだと書いてあります、どうしてそんなことがありえましょう、だってクジラの喉はせまく、クジラが食べるのは魚ですから』と。で知ってるかい、聖フィラレートがなんて答えたか。聖人はこう言ったさ。『もし聖書に、イオナはクジラを呑みこんだと書いてあったら、私はそれすらも信じたことでしょう』。なぜなら聖書とは神の言葉であり、神の言葉とは侵しがたいものだからさ……。

それからもう一つ。講演の冒頭で言ってたね、宗教は博物館に収めるべきで、もう宗教の時代は終わったと。確かにあなた方は教会から博物館へ、イコンも十字架も聖人の不朽体さえも移したさ。しかし正教会の精神は博物館へ移せるものではない、正教の精神は紡ぎ車みたいに展示できるものじゃない。絶滅させることなどできない……。たとえある日、ハリスチアニンがほんの数人になったとしよう、その次の時代には以前の数倍にも膨れ上がるのさ。もちろん知っているよね、初期ハリストス教の時代に支配者だったネロ帝やディオクレティアヌス帝やユリアヌス帝（訳注：いずれもキリスト教の迫害者）は、ハリスチアニンを皆殺しにして絶滅させようとした。でどうさ。これらの支配者はどこにいる。彼らの悪い記憶は滅びてしまい、ハリストス教は、正教会は生きていてこれからも生きる。分かったかな」

生まれ変わったマチュヒン

マチュヒンは別人のようでした。そして明らかにはっきり意識していました、この素晴らしい理解しがたい合理的な世界は至上の理性を、神・創造主を証明していることを。そして誰も神以外には、この世界を創ることはできなかったことを。神は命の源泉にして統治者だということを。

神はすべてであり、すべてのものだということを――。
　そうです、マチュヒンは変わりました。彼は無神論の虚偽と醜さと愚かさを痛感していました。そして驚いていたのです、どうして自分が無神論者であれたのか、と。無神論は蒙昧であり彼も盲目でしたが、今では見えるようになりました。心の目が開いたからです。今まで闇の中で生活していましたが、今は目に見えない手が彼を暗闇から光へ導き出したのでした。それは聖神（聖霊）の恩寵であり、真実の神（霊）の恩寵が彼の心に触れたので、心はまた命へ向けて生き返ったのです……。
　誰が世界を創ったかというデミヤン・ルキチの質問に対し、マチュヒンはもう迷わずに答えました。
「世界は、偉大で全能なる理性によって創られました。理性的なものは理性的なものからしか生じません。それは光が光から生じ、闇が闇から生じることと同じように明白なことです」
「ということは神はいるのかい」とデミヤン・ルキチはひるみませんでした。
　皆、息をのみました……。
「はい、います」と穏やかに愛をもってマチュヒンは答えました。
　聴衆はほっとして嬉しそうに長いため息をつきました。

聖ルーシ（聖ロシア）

その瞬間、校長が席から跳び起き、出口へ走ってドアをバタンと閉めたかと思うと姿を消しました。

デミヤン・ルキチは歓喜していました。そして思わず十字を描き、大声で堂々と「天の王」の祈祷文を歌い始めました。

すると人々も応じました。祈りは最初のうち前列の人からそろい始めて、そのあと他の人も祈りの精神に包まれていきました。全員が席から起立して歌っていました。祈りは信者の心から流れ出て天に向かって昇ってゆきました。

かくして真実と信仰は勝利したのです。村で平凡に暮らす養蜂家が神への固い信仰を持ち、現代科学の知識に少し通じていただけで大胆に正しい道を説き、講演者であった無神論者の目を開くことができたのです。この無神論者こそ、特別な教育を受けて最新情報で理論武装した煽動家だったにもかかわらず——。

おわりに（再編著者より）

神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。
「わたしはアルファであり、オメガである。」（黙示録一・八）

宇宙飛行から帰還したユーリ・ガガーリンは言いました。「私は惑星の浮かぶ宇宙空間におりましたが神を見ませんでした。だから神はいないのです」。この発言を真理として受け止めた一般人もいました。つまり現代科学は神の存在を否定すると理解したのです。一方、ガガーリンが月にさえ着陸できなかった点から、次のように考えた人もいました。「ガガーリンには、あたかも全宇宙空間を調査したかのような発言をする権利があるのだろうか」と。周知の通り私たちの銀河系は、光速（秒速三十万キロメートル）で突っ切っても百万年かかると言われ、他の星雲に至るには百五十万年かかるだろうと言われています。しかもそのような星雲が宇宙には何十億も存在するのです。亡きガガーリンの素朴な見解を真理として受け入れることができるのは、ただ故意に神を否定する人だけでしょう。

反対に、アメリカの宇宙飛行士団は初めて月の着陸に成功した際、月の軌道上で「初めに、神は天地を創造された」と聖書の冒頭句を読み上げました。そしてこの朗読はテレビを通して全世界に放映されました。ガガーリンの結論は他の宇宙飛行士ましてや学者に受け入れられるものではなかったのです。学者ビョルケが言った通りです。「現代科学は、聖書の根本真理を打ち砕いていない。私は神を信じ、イエスを信じ、聖書を信じます」と。

天空に散らばる恒星や惑星や星々の中で、私たちの地球はあまりにも小さく目立たない塵のようです。この塵の上に人が住んでいます。ここで人の陥罪が起き、ここで人の救いが成し遂げられました。この世界を創った主ご自身が人の姿をとって地上に降り、人々と共に三十三年半過ごされました。しかし被造物は自分を創った主に対して拳を上げ、主を十字架の死に売り渡したのです。

人は、神と比べて何物でしょうか。無です。しかし今でも当時と同様、天に対して厚かましくも挑戦する人がいます。無分別な頭で自分を創った主を否定して、永遠の滅びを自分に招いているのです。

しかしながら神への信仰が消え去ることはありえません。信仰はこの世が存在する限り人々の間で過去も未来も生き続けていくものです。信仰はデミヤン・ルキチのような心の清い人々の中で生きるのです。読者の皆さん、あなたもこの賢い老人にこの本の中で出会えたことでしょう。

S・ラヴロフ

弁護の技能

アレクサンドル・ズナトノフ

『神は我らと共にすればなり』と題した本を読んだことのある人は大勢いるだろう。しかしその著者名「Ｓ・ラヴロフ」は偽名のようである。この作品の人気は底知れない。〝博学な〟無神論者が〝無知な〟信者を説得するときに使うありきたりの論証を徹底的に論駁するこの本は、増刷総数が毎年百万部を超えてもなお需要が減らない。

しかしながらこの作品の真の著者名やもともとの題名はあまりよく知られていない。特に重要なのは作品の出典であろう。この短いキリスト教の護教講話に付けられた原題は『いかに神への信仰は生じたか（ソ連邦における公開討論）』で、古儀式派教会（訳注：一六六六年にロシア正教会から分かれた一派）の高名な作家かつ伝道師であったフョードル・エフィモヴィチ・メリニコフ（一八七四―一九六〇）によって一九二〇年に書かれた。当時はボリシェヴィキによる教会迫害が激しかったため、シベリアの密林地帯で書いた、と著者自身が示している。

一九〇五年に公布された「信教の自由容認の原理増強に関する元老院政府への勅令」以降、こ

うした国民の「信仰論争」は革命前ロシアの精神生活を示す大きな特徴となった。この論争に特に興味を示したのがロシア教育界である。そのうちの一人、モスクワの新聞社『ロシアの言葉』の編集長アレクサンドル・パンクラトフは「メリニコフの卓越した演説的才能は、彼をロシア社会の第一線まで引き上げた」と書いた。一九一七年までは「古儀式派識者」対「反宗教者」の講演会や公開討議会が工芸博物館などでよく開かれた。入場券は決して安く入手できるものではなかった。それほど当時の聴衆は真面目な神学討論に対して特段の注意を払っていたのである。主が常に勝利を与えたキリスト教の弁護者は、救い主の次の戒めをいつも覚えていた。「会堂や役人、権力者のところに連れて行かれたときは、何をどう言い訳しようか、何を言おうかなどと心配してはならない。言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる」（ルカ一二・一一―一二）。

戦闘的な無神論者らは公開討論会で連戦連敗をなめて自分たちの弱さを知るにつけ、集計結果の報告を当局に強く求めた。古儀式派の主教インノケンティ（ウソフ）はこう証言している。「ソ連政府は宗教問題に関する公開討論会開催を一九二九年で打ち切りました。しかしそれ以前に許可されていた時代でさえ、有能なキリスト教擁護者は公開討論会の演壇に上るとき、自由を失う危険や、また時には生命を失う危険さえ冒していたのです。その中にはソ連収容所や強制労働のうちに命を落とした人も少なくありません」

後日メリニコフは当時のことを振り返って言った。「……私はソ連邦の既決囚であり、（中略）

宗教活動家すなわち『反革命分子』という理由で銃殺刑に処されるべき身分でした。（中略）私を探し出すことはできませんでした。（中略）シベリアの未踏の密林地帯にいたからです。ボリシェヴィキの部隊は私の捜索のために三度やってきましたが、毎回、手ぶらで帰っていったのです。（中略）一九二五年から一九三〇年後半まではカフカス山脈で過ごし、そこで養蜂業に携わっていました。（中略）日中に書くのは危険でした。なぜなら時々、当局からアカ（訳注：共産党員）の連中が養蜂場に覗きに来たからです。だから夜間に移動式の掘立小屋の中で書くようになりました。灯油ランプの薄暗い光の中です。だがまもなくある夜、隣の養蜂家がやってきて警告しました。『危険だ。タイプライターを叩く音が夜の静寂を突っ切ってかなり遠くまで聞こえている。もしかしたら通りがかりの人が不審に思うかもしれないし、その人がアカってことも有り得る。そしたら捕まるのはあなただけじゃない、われわれだってこのままでいられるかどうか分からない』。夜間にタイプライターを打つことを止めて昼間に書くようにしました。とても危険でした。ほぼ毎分と言っていいほど、この養蜂場へ車で向かっている人はいないか、徒歩で忍び寄る不審者はいないか、掘立小屋から身を乗り出して外の様子を窺っていました。（中略）神様が助けてくれたので外国（ルーマニア）に移住し、そこへ母国で書いた無神論反駁の作品をほぼすべて搬出できたのです……」

　当時、メリニコフの知名度は方々で非常に高まっていた。彼は精力的に執筆し、積極的に出版

し、しばしば公開討論会や講演会で演説した。作品は欧州各国語に翻訳された。反響があったのはベオグラード、エルサレム、パリ、ワルシャワ、キシナウ、アテネ、ハルピン、ニューヨークである。オックスフォード大学のニコライ・ゼルノフ教授は権威ある文芸作家資料書誌事典『亡命ロシア作家』の中に、古儀式派から唯一メリニコフを登録している。

　メリニコフは古儀式派で最も多く執筆した作家の一人である。その筆による書籍、冊子は何十冊もあり、定期刊行物に掲載された記事や寄稿は何百件にも上る。書かれた作品は多様でありジャンルを問わない。辛辣な時事評論、史料調査、歴史研究、神学作品など数え上げれば枚挙に暇がない。第二次世界大戦前にキシナウで出版された反無神論の文献は『無神論駁論』全巻にすべて収められた。メリニコフと懇意にしていた古儀式派の名高い商人かつ後援者V・リャブシンスキーは、次のように断言している。「これらの著作は、著者自身がソ連邦において実際に体験した事件が元となっています。実は、メリニコフがソ連邦から逃亡してまだ三〜四年しか経っていません。彼は亡命以前にソ連邦に住んでいた頃から、身の危険を冒してボリシェヴィキの思想と果敢に闘ってきたのです」

　メリニコフは多作で長い人生を送った。老年まで生き、息を引き取るまでルーマニアの秘密警察「セクリタテ」のあからさまな監視下にあった。一九六〇年五月一三日（新暦二六日）、故郷チェルニゴフ県からはるか遠く離れたルーマニアのマヌイロフ古儀式派修道院にて主のもとへ逝

き、遺体は同修道院の墓地に埋葬されている。

『無神論駁論』全巻は、どのジャンルもすべてキリスト教の護教論の伝統、つまり公開会談、公開討論、舌戦の過程を聴衆が見守る生きた対話形式に則っている。そのうちの何巻かは増刷され、外国語に訳され、キリスト教信仰の弁護者のための実践的な手引きとなった。

こうしてロシアの読者のもとへ戻ってきた『いかに神への信仰は生じたか』は外国で四回出版された。一九三八年にスロヴァキア（ヴラジミロヴナ市）の克肖者イオフ・ポチャエフスキー書房が出版し、戦前にYMCA-press出版が原語およびセルビア語訳で出版し、また同じ形で一九六一年には米国ジョーダンビルの在外ロシア正教会至聖三者修道院出版部が出版した。ロシア人読者に『神は我らと共にすればなり』という題名で知られる原本は、二〇〇〇年に出版社「教会」が出版した。それ以前の印刷物はメリニコフ独自の鋭い筆致と異なる文体の加筆が多く、原作の語感が損なわれていたからである。

『いかに神への信仰は生じたか』の主人公、柔和で善良な村の賢人デミヤン・ルキチ、つまり著者の「生き写し」ともいえるこの人物像は脳裏に残りやすく、名うての戦闘的無神論者アルトシューレルやマチュヒンとは対照的である。〝無知な〟養蜂家は、無学な漁師だったあの使徒たちと同じように、ただキリストへの信仰を弁護しただけでなく、無信仰だったマチュヒンをキリスト教へ改宗させた。使徒が「神から生まれた人は皆、世に打ち勝つからです。世に打ち勝つ勝

利、それはわたしたちの信仰です」（ヨハネ一、五・四）と言った通りである。

この「打ち勝つ信仰」こそ、盲目な無神論者を炯眼な信者へ変える奇跡を解くカギであろう。主の援護こそ、〝無学な〟村人である護教家が賜った「弁護の技能」の原動力であろう。つまり、信じる人には常識の壁を越える力が与えられるのだ。それは神ご自身が証した通りである。「どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである」（ルカ二一・一五）と。

『無神論論駁』の第一巻「いかに神への信仰は生じたか」は、読者を「この世の暗闇」（エフェソ六・一二）から守るために出版されるのである。

アレクサンドル・ズナトノフ

2019年5月31日　初　版　第1刷発行
2019年8月10日　第2版　第1刷発行

原作著者 ……… F. メリニコフ
再編著者 ……… S. ラヴロフ
翻訳者 ………… 土田定克
翻訳監修者 …… アレクセイ・ポタポフ
校閲者 ………… 松島雄一、松島純子
編集者 ………… アンドレイ・アフォニン
画匠 …………… アレクサンドル・プロステフ
（表紙：「天使と長老」、2000年）
発行者 ………… 日本ハリストス正教会教団
東日本主教々区宗務局
仙台市青葉区中央3丁目4-20